

極樂通信

UBU

Vol. 10



極楽通信
UBUDY

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H



photo: Y. Hori

バリの子供たちはとてもいい顔をしている。同じアジア人とは思えない目鼻立ちもさることながら、屈託のない笑顔には恐れ入るほど心が洗われる。

人間は生まれてくるときには超純粋な状態のはずである。年を重ねるにつれていろいろな添加物が付加されて徐々に大人の顔に変化してくるのであるが、この度合いが日本の子供たちに比べて圧倒的に違うと思うのである。明らかにバリの子供たちは無添加状態が長いのである。バリでは子供は大変かわいがられて育てられているが、地鶏と同じように放し飼いにされて自由に育っているような気もしてしまう。とはいっても自立は早く、5歳くらいの子でも非常にしっかりしている。年下の子供たちの面倒もよく見るし、親の手伝いもよくするし、礼儀はいいし、わがままに泣いたり駄々をこねたりすることもない。(統計を取ったわけではないが少なくとも私はそう思う)

この純粋無垢のようなバリの子供たちの笑顔に接すると、自分の中の怪しい添加物が浄化されて頭のとっぺんから気化して抜けていくような気がする。私にとってバリの子供は聖獣バロンのような存在ともいえるのである。

堀 祐一

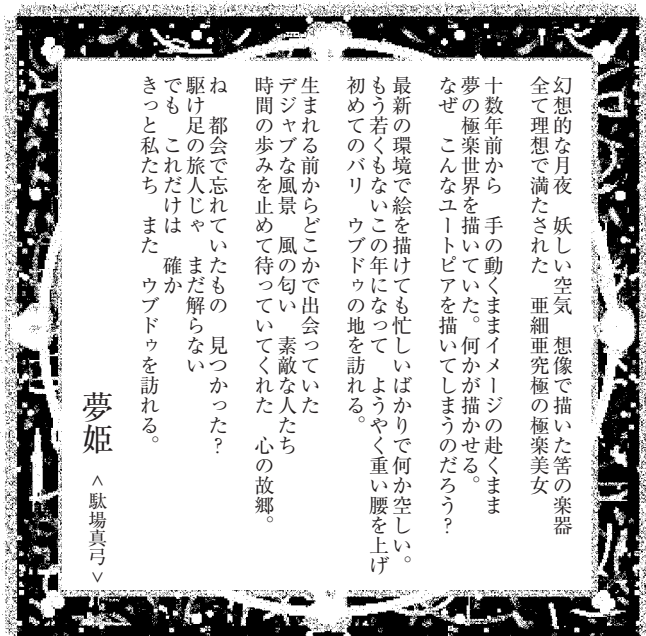
இ பி பி பி

Vol. 10 1995 Augustus

Contents

● Leporan Koresponden Khusus	
BALI にライオン出没! -----	4
Payangan にグランドキャニオン出現 -----	5
● Culture Shock	
Sepeda Motor -----	6
Trance <トランス> -----	7
● Kabar Baru Berita Lama	
Bazaar に行こう! -----	9
● Bagaimana Caranya? [2]	
バリ式正装のすすめ/男性編 -----	10
● C・O・L・U・M・N	
UBud にもいた! 幻の魔法使い -----	14
● C・O・L・U・M・N	
Bali, 自由を求めて -----	16
● Belajar Tari&Gamelan -8-	
オダランで踊る時 -----	17
● UBUD よろず百科	
Warung (ワルン) -----	18
● Enak Enak Ubud おいしいものに目がない	
とっても不思議な味 "RUJAK" -----	20
こぼれ話/マンゴスチン -----	21
● BINTANG/2	
ビンタン涅槃楽 [2] -----	22
● Toko BEST 店	
Wardani Boutique -----	28
● Warung 味な店	
Tegal Cafe -----	28
● Pondok Manis 私の常宿	
A. A. Anom Putra Bungalow -----	29
● Dari U.S.A.	
Dari America -----	30
● その他のニュース -----	31
● ウブッな人々 -----	33
● オダラン情報 -----	34
● Pengumuman 伝言板 -----	34

○表紙のこぼれ○



編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

- Macintosh フォーマットの FD (Text Data)
- Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)
- E-Mail :
MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)
GCB01162 : 堀 (NiftyServe)
potomak@st.rim.or.jp (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告：Kebun Binatang (動物園)

BALI にライオン出沒！

ヌガラと聞いて何を連想しますか？…そうです、豆腐を作るときに出来る絞りカスのことです。それはオカラでしょ。そうでした、正解は蝶々がさなぎからかえる時に脱いでいくもの。それはヌケガラ、も〜おじさんたらボケるんですけど。ボケ老人はほっておくことにして。ヌガラと言えどももちろんスアール・アグンのジェゴグですよ。そつがない小誌編集部としては、ここで「極楽通信・UBUD」の愛読者であるカズコ・スウェントラ女史に敬意を表した発言をしておきます。

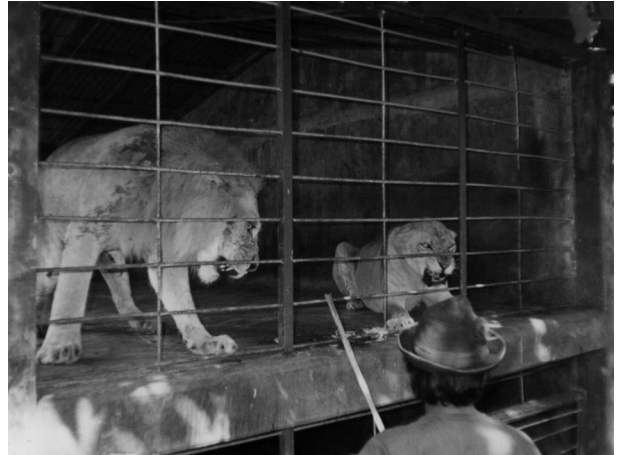
驚いたことに、ヌガラはジェゴグだけではありません。ななな〜んと、動物園があったのです。Kota

Negara の南、Perancak の村に、動物園と

言っても、あなたが今イメージした日本にある動物園とは少々スケールが違うようですが、確かに動物達はいました。孔雀・コウモリ・大蛇・豚・鶏・猿・

鹿などが、あなたの町の

小学校の飼育小屋のような檻に飼われています。残念なことに、怪傑ハリマオ（虎）はここにはいませんでした。特に見どころとしては、百獣の王ライオンと熱帯のシンボルであるワニ。ライオン三頭は、今にも壊れそうな粗末な檻に入れられ、時おり飼育係のパパが棒でつついてイジメるため、凄味のある顔がすぐ近くで堪能できます。運がいいと、臭い生肉が与えられるところが見られ。「こっ、これは何の肉？」とパパに尋ねたところ。「犬だぎゃー、カッカッカッ」と笑っておりました。ワニ園は 30m 四方の起伏のある広場に、今にも飛び越えられそうな高さのコンクリートの塀に囲まれて、二十頭ほどのワニが放し飼いになっています。そんな危険な状態のなかで十数種の動物達があなたを大歓迎してくれます。是非一度お越しください。経営者に成り代わっ



てお勧めします。

そしてもう一つの売り物に水牛レース (Bull Race) があります。本来は収穫あとにおこなわれる年中行事 (今年は九月) ですが、ここでは二週間に一度 (木曜日) に営業として行なわれています。それでも観光客としては、かなり満足のいくものです。二頭立ての水牛に引かした荷車に中腰で乗り、たずなを引いて走らすのですが、これがいきなり物凄い勢いで走りだし、二騎の牛車が先を争い 1800m のダート・コースを驀進します。観光客も飛び入りすることができ、スリルを味わうことができます。が、見ていての感想としては、もしあの車輪が外れたらどうするのかな？もし水牛がコースを外して暴走でもしたらどうするのかな？と心配です。そこんところ自分でバンバンできる人は是非試してください。

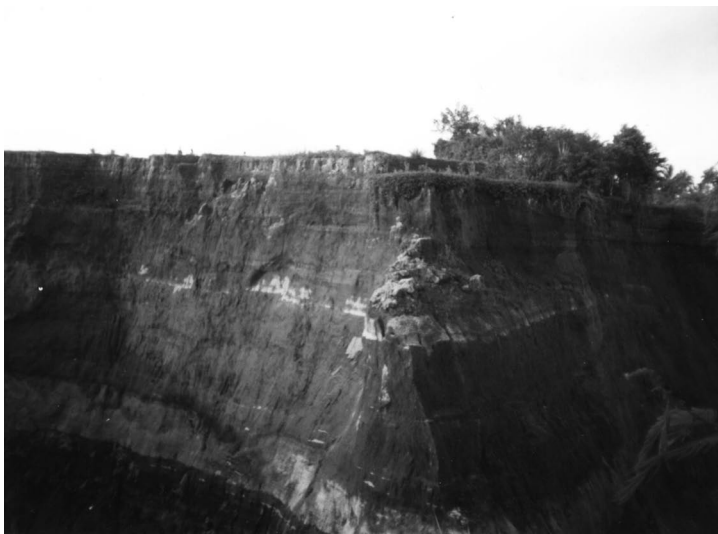
★年内予定は、9/14. 9/28. 10/12. 10/26. 11/9. 11/23. 12/7. 12/21

★詳しい問い合わせは、影武者広報課=担当・伊藤まで。



Payangan にグランドキャニオン出現

UBUD から北に約 15 キロ、ギアニャール県・バヤンガン郡・PUU 村での出来事。この異常現象は去る 1995 年 4 月 23 日に、ひとりの農夫によって発見されました。農夫はその時の状況をこんなふうには語っていたそう。 「わしゃ、いつものようにイモ畑に仕事に出かけた。いつものようにいつもの道を歩いたら、途中で道が無くなると。すごい大きな穴ができて絶壁だぎゃ、ほんで、わしの畑がのうなると。そら〜びっくりした。もうちょっとで落ちるとこだったぎゃ。何が起きたのか、わしゃ、狐につままれた気持ちだぎゃ」



そこで「極通」取材班はさっそく現場に直行し、この目で確認してきました。バヤンガン郡に入りいくつもの丘をこえて PUU 村へ。田んぼと畑が広がっているところまで出ると、車やバイクが列をなして駐車してあるのが見える。何やら道路わきにわかつくりの屋台も並んでいる。Bakso 屋もある。そう、そこはバリ人の、もはや観光地になっていたのです。道からその屋台のわきを畑に入っていくと、も

うすでに何百人(?)もの人の足によって踏み固められた道がしっかりできあがっていた。そして、すぐそこに見えてきたのが…、まさにグランド・キャニオン!! 約 100m 四方の畑が、80m ほどすっぽりと陥没しているのです。陥没した部分はすでにむこうに見える深い谷とつながっていて、わかりやすく言うと、大規模な崖崩れみたいな感じもするのですが、それにしても、平坦だったイモ畑がいきなりすっぽりと 80m も陥没してしまうのでは、第一発見者の農夫のおじちゃんはずいぶん驚いたことでしょう。そして笑えたのが、デンパサールあたりからはるばるとここまで見にきたり、屋台まで出してしまう、そしてそこで Bakso なんぞを食べてしまうバリ人のリアクションである。そして、いつまた崩れるかもしれないような、危険な断崖絶壁のふちに立って肝試しをする人もいれば、なんとずるずると一番下まで降りて手をふっている奴もいる。さらに、こんなに危い状況なのに注意書きも柵もつからないお役所。この無邪気なのんきさ、ああ、バリの人達ってホントに楽しい。

でも、見に行くときは、あなたも気をつけてね。



この辺に、崖っぷちに立つ人間が見えるけど、わかる?

Sepeda Motor

「人間は考える葦である」とかの高名なパスカルおじさんはおっしゃた。そしてわが友人 WAYAN 君は「オートバイは UBUD の人の足である」と名言をはいた。

UBUD の人々の足であるオートバイ。インドネシア語でオートバイは Sepeda Motor (スベダ・モートル)。スベダが自転車でそれにモーター (インドネシア語ではモートルという) が付いて直訳すれば、原動機付自転車とでもいおうか。しかしこれもれっきとした 80cc のオートバイである。「原付自転車」なんと時代を感じさせる懐かしい響きのする言葉だろう。日本では昭和の初め本当に自転車にモーターを付けて走っていた時代がある。普通は自転車として使い、疲れたり上り坂ではモーターをスタートさせオートバイに早変わりである。今またエコロジーを考えてか、日本じゃこういうのが商品化されてるらしいですね。BALI で見かけるオートバイはほとんどが日本製のカブ・タイプ・オートバイ (婦人用オートバイとでも呼ぼうか) で HONDA・YAMAHA・SUZUKI の三社が独占している。性能の面で圧倒的に HONDA の評判がよく、オートバイのことを HONDA と呼んでいるほどでの人気である。イタリア製 (?) のベスパも価格が安いという点で人気がある。カブ・タイプより排気量の多いオートバイのことをその大きさが男性的にみえるからなのか Sepeda Laki-Laki (男のバイク) と呼んでいる。たしかにカブ・タイプと違いカッコいい。

前置きがひじょ〜に長くなってしまったが、このスベダ・モートルが UBUD でスーパーマン的活躍をするのである。「あれはなんだ? 鳥かジェット機か? いやスベダ・モートルだ!」車と車の間をスイスイと超曲芸的の走行をみせるスベダ・モートル。ある時は乗用車のように 5 人の親子がひしめきあって 1 台にまたがっていたり、またある時はトラックに変身し、とんでもなく大きな荷物をのせて運んでい

る。グボガンと呼ばれる、でっかいお供え物を頭のにせたまま運転したりする。

のけぞってしまうほどのカルチャー・ショックである。事故は無いかと他人ごとながら心配になってきてしまう。彼らの辞書に事故という言葉はないのかと思わせるほど彼らの運転テクニックは無謀である。我々から見ればまさに暴走である。VOL. 8でスベダ・モートルの免許証の取得についての報告があったが読んでの如く、免許証を持っているのは善良な市民でまだまだ多くの方が無免許なのである。法規なんてあるのかどうかも知らない状態。免許証を取れるとは思われない10才そこそこの少年・少女がオートバイに乗っている。これで事故が無いわけがない。

「裸で裸足でノーヘルで」どこか暴走運転のキャッチ・フレーズのようなのであるが、これが現実目の前で展開されるから驚いてしまう。まだまだ続く暴走運転キャッチ・フレーズ「バック・ミラーは無い、あってもみない」「二重追越しなんのその、三重追越しだってOK」「狭い道から広い道路へ左右確認なしの決死の突入」。ヘルメット着用は義務づけられているのだが、このヘルメットがまたおそまつ・とどまつ・じゅうしまつ・もひとつおまけにやそまつ（註：これは小田蘭丸さんのお父さんの名前です、スミマセン）なものにはびっくり仰天。極めつけのカルチャー・ショックは正装（バリ・ヒンドゥーの儀礼服）をすればノーヘルで大丈夫だということである。信仰心の厚いBALIの人々は、正装すれば神が見守ってくれるとでも思っているのか、やはり思っているようである

「神のご加護御を…OM」



2

Trance <トランス>

カルチャー・ショックの究極は、なんととっても「神秘の島・バリ島」の名にふさわしいトランスだ。このトランスという言葉、辞書には夢幻境・恍惚（霊的陶酔状態・全身硬直症の状態）・失神・人事不負・昏睡状態とある。またそのほかの文献には、五感の働きの一時的停止、心臓の鼓動の高まり、呼吸の停止、感覚諸器官の活動の消滅、両目は見開いたまま何も見ておらず、精神は虚脱し身体は身動きもしない…。などなど様々な解釈がなされている。しかし、バリのトランスはそんな単純明快なものではない。それでは実体はいかなるものか、考察してみた。バリの人にトランス状態をなんと言うのか尋ねてみたところ、バリ語で「Kerauhan(=rauh:インドネシア語でDatang、来るという意味)」という答えが返ってきた。神が降りて来るという意味だ。神と合体し、神として話し、神として行動し、自ら神として無限の享楽を味わい、霊的な活動をし、神が憑依した状態をいうそうだ。う～ん、やはりバリは神々の住むにふさわしい島である。

オダラン（寺院祭礼）の儀式や芸能の中で時々Kerauhanを見ることがある。科学的に解釈するには無理があると思われるほど、それは、まさに神が降りて来るという言葉そのものである。

◆UBUD・Padangtegalの観光客向けパフォーマンスでサンヤン・ドゥダリ（二人の少女に天女が憑依し、踊りだしてしまう）とサンヤン・ジャラン（一人の男性が馬を模した祭具にまたがり、ココナッツの皮の焚火をけちらして踊る、ファイヤー・ダンスと呼ばれているもの）が演じられているが、これはショーでありKerauhanではない。Peliatanのパフォーマンスでは、クリスを持った上半身裸の男達が自らの胸にクリスを刺すシーンがあるが、これも



やはり本物ではない。しかし迫真の演技なので、一見の価値あり。

サンヤンは、猿に憑依されるサンヤン・ボジョ、豚に憑依されるサンヤン・チェレンなど、二十数種あると聞く。そらはカラングサム地方のオダランで見られることもあるという。また、クリスを自らの胸に刺すシーンはUBUD近辺のオダランの儀式やチャロナラン劇で見られることがある。

ここで、実際に目撃した事例を三つ紹介しよう。

◆クニンガンの十五日後、TEBESAYAのPr Dalem Puriでおこなわれるチャロナラン劇。いよいよ劇が終演に近づき、ランダが登場する場面になる。ランダに立ち向かう男達が八人、舞台のそでで出番を待っている。上半身裸で手にはクリスを持ち雑談しながら準備運動をしている。中には知っている顔もある。いよいよ出番、「ワー」という喚声とともに男達が舞台上に駆け出して行く。しばらくランダとの絡みがあった、その直後。ランダの咆哮とともに一瞬に男達がKerauhanしてしまった。男達は嬌声を発し地べたにもんどりうってものがいている。幾人かが血を出している。そこにプマンク（司祭）

がゆっくりとした足取りで登場し、男達に聖水をかける。すると不思議にも男達は正気にもどっていく。それでも一人二人が正気に戻っておらずプラに担ぎ込まれて行った。始めはパフォーマンスと同じで演技かと疑い、確認のためPuraをのぞいてみたが、どうもそうではなく、本物のトランスだったようだ。

◆同じくPr Dalem Puriで、バングリからの一座によって演じられたチャロナラン劇では、Kerauhanした四・五人の男達がひよこをムシャムシャ・コリコリという音をたてながら、口を血で真っ赤にして食べてしまうのを見た。また、ランダが墓に向かって駆け出してしまい、皆で追いつけたシーンもあった。ランダは墓に埋めてある死体を掘り起こし食べてしまうとされている。その時の観客は同じ靈気を感じたのか、ランダの走り抜ける道を作るかのように、一瞬人垣が割れ、そこをランダが走り抜けていった。

◆儀式の中でのKerauhanは、BatukaruにあるPuraで目撃した。陽が高くないうちにでかけたが、もうすでにKerauhanしたIbu-Ibuが空気と戯れているかのように、ゆっくりとルジャンを踊りながらPuraの奥から出てくる時であった。Ibu-Ibuの後から、プマンクが三人、男達の肩車に担がれて出てきた。その三人ともが入神しているようだ。三人のプマンクはバレの廻りを三回まわったあと、バレに座した。プマンクには神が憑依しているようで、何か村の長に伝えている。大勢の正装した村人が下に座り、この光景を静かに見つめ聞き入っている。それは今後の作物の出来であったり、儀式に関することであったりするという。それぞれ三人のプマンクからのお伺いにはかなりの時間がかかった。この間もIbu-IbuはそれぞれのKerauhan状態に入ってルジャンを踊り続けている。突然「ワー」という喚声とともに走りだす男性や踊りだす女性が続出する。それは真昼といえども靈気漂う摩訶不思議な光景である。

まだまだたくさんのKerauhanを目撃したが、ここでどんなに説明しても疑い深いあなたには理解できないと思う。やはり「百聞は一見にしかず」いつかの機会に体験してください。きっとあなたもバリの不思議に度胆を抜かすことでしょう。

Bazaar <バザール>に行こう！

少し知り合いになると気軽にいろいろ誘ってくれるバリ人。あなたは「一緒にバンジャールのバザールに行きましょう。」と誘われたことはありませんか。

バンジャールとは、一番小さい村の組織の単位のこと、日本の町内会みたいなもの。そのバンジャールごとの青年男女が、年に1～2度、3～4日ほど自分達のワンティラン（集会所）で、仮設のナイトレストラン・バーを開業するのです。青年団はすべてボランティアとして全員が参加し、売上の利益はバンジャールの設備や Pura (寺) の修復、道路の整備などに使われます。

お客として来るのはもっぱら地元(村)の人々。他のバンジャールの友達にわざわざ招待状を配り、営業期間中の売上目標が事前にミーティングで決められます。いつもはがらんとしている集会場が、バザールの時にはヤシやバナナの葉っぱ、ロマンチック(?)なカラー電球で飾られ、近くの学校から机やイスが借り出され、まるで学園祭のようなノリのまま、夕方遅くなってから営業開始。入口でわざわざ名前を記帳していると、バンジャールの若者が笑顔で席までエスコート、ドキドキして座っていると、なんとクバヤ姿のレディがホステスとしてそばに座ってくれます。でも決して日本の飲み屋のホステスさんのように対応してはいけません。あくまで彼女達はお給仕さんとして、静かに座っているだけなのです。アトラクションも各バンジャールで趣向をこらし、地元の若者のロック・バンドが演奏したり、DJ 係が最新の Pops やレゲエ、ダンドゥットを B・G・M でガンガンかけてくれるし、夜もすっかり更けた頃、とうとうディスコになって、最終日には朝まで盛り上がりっぱなし。生温いビンタン・ビールが大ビン1本、5,000 ルピアはちと高めですが、若者達は寄付感覚で何本もオーダーして、時々ケンカが始まる程泥酔します。

普段、お酒に酔うことはとても恥ずかしい事と思っているバリの人達も、この時ばかりは、無礼講。そしてまた、若者達の恋が芽生えるチャンスの場所でもあります。

もし、バンジャールのバザールに誘われたら、ぜひ行ってお金をたくさん使ってあげてください。

そして、きっとあなたにも新しい恋のチャンスが…、あるといいですね。



▲テーブルの番号札やら飾り付けやらが、全部手作りで学園祭ノリ。

Bagaimana Caranya?

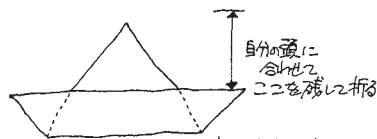
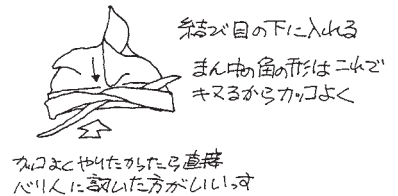
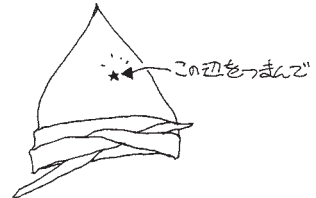
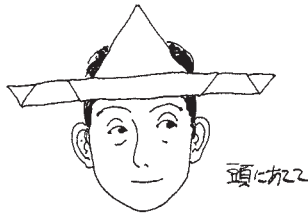


バリ式正装のすすめ ---- 男性編 ----

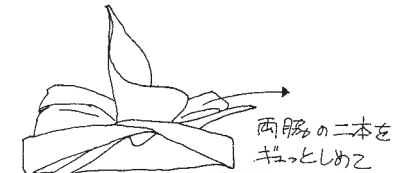
バリで役立つ How to シリーズ第二弾、バリ式正装のすすめ<男性編>をお送りしましょう。

[1] Udeng : 頭に巻く布、ウダン。

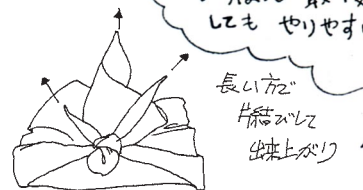
イラストのように、三角形の布状態のはじめから作るもの、真ん中の部分だけ簡単にミシンで縫ってとめてあるもの、ゼーんぶ形が作ってあって、そのまますっぽりとただ被ればいいもの…と、いろいろ売っているの、自分に合ったものを買おう。巻き方は、イラストを見てね。



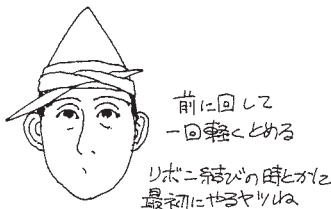
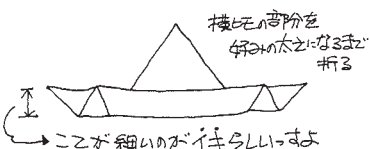
大体半分が『4』で、半分が長いヤリ、小さいヤリ、いろいろいるからホントは 好きで。



※6.7の作業を いちばん最後に しても やりやすいと 思うよ



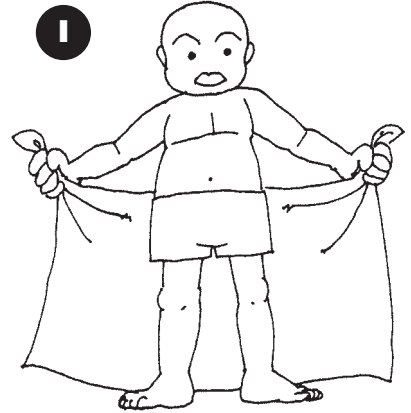
三本が2Kもピンと立って来れば、



サルンの巻き方

[2] Sarung : 腰に巻く布、サルン。

男性には、やっぱり渋い色目のバティックかイカットがいいと思う。ポイントは長さが2.5mくらいなきやダメなこと。イラストにもある通り、前に垂れ下がる部分をつくらなきゃいけないからだ。巻き終わった時のすそがホントはヒザ下のあたりでいいのだが、おしゃれな若者達のあいだでは、くるぶしくらいまで長く巻くのがイキらしい。



[3] Saput : サルンの上にひと巻きする布、サブツ。

Slendang : 帯。

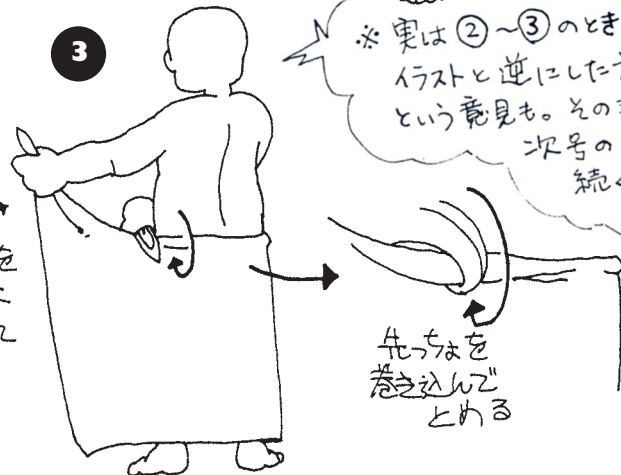
サブツはサルンを巻いた上に、合わせ目を前にして巻き付け、その上からサルンとサブツを押さえるようにして、スレンドアンをキュッとしめる。ちょうどウエストのあたりで、なるべくきつく結ぼう。



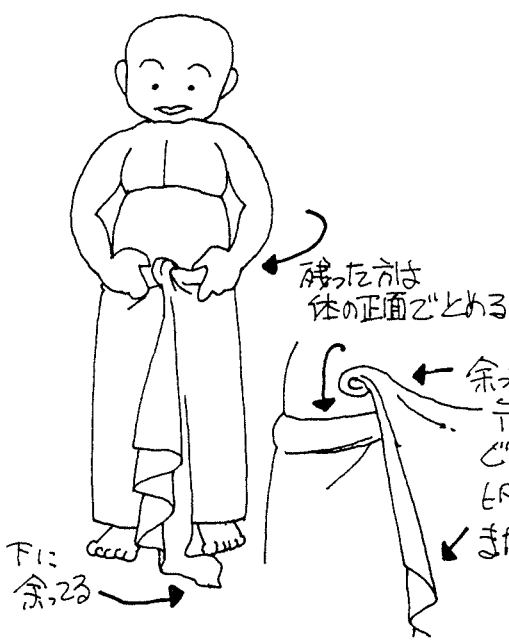
[4] Safari : 上衣、サファリ。

長袖もしくは半袖の、衿のある上着。これはシンプルなシャツでもいいし、Ubudに何軒もあるテイラー（仕立て屋さん）にオーダーメイドでもいい。その場合、通常サファリと呼ばれる日本の学生服のようなスタイルになる。短期の旅行で仕立てなんてしてられないよ…という方にお薦めしたいのが、UBUDのビナ・ウィサタ・インフォメーションのとなりにあるメンズ・ブティック "Mr. BALI" の白いコットンシャツ。生地、縫製、デザインどれも Bagus でじゅうぶん

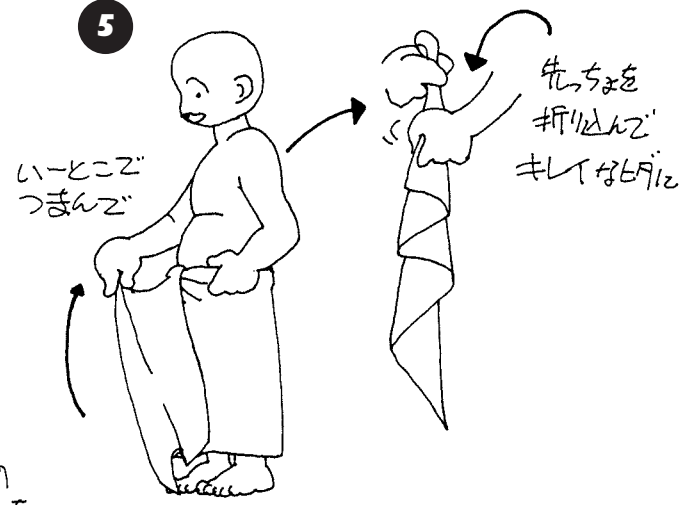
日本でも着られる。日本円にして千円くらいなので超オススメ。逆に長期の方は、真白の長袖、金ボタン付きなんていうサファリをオーダー・メイドしてみよう。生地代込みで3万ルピアくらいから作ってもらえる。ただし、生地がいいほど値段は高くなるからね。ちなみに Bali ではコットン100%より、化繊の方がバグースで高級品です。すぐ乾いてアイロンがいらないから…という理由らしい。



4



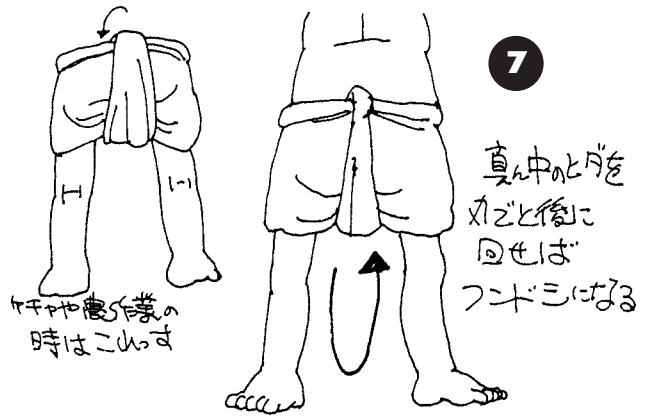
5



6



7



イラスト：深谷 陽
 モデル：イトウさんとサカの Big baby ちゃん

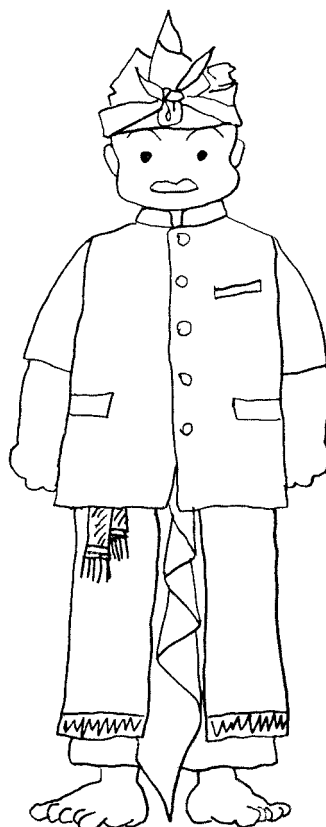
さあ、バッチリきまったかな？

今まで見てきたところでは、日本人男性みなさん、このバリの正装がとってもよ〜くお似合いになる。この正装した時が一番かっこよく見えるのは、バリ人も日本人も同じかな。

とにかくバリの男性は、正装しちゃうと、もう「ごめんなさい！」ってあやまりたくなるほどステキになる。そこで、片耳にジュブンの花なぞさしてもらった日にゃあ、あんた、そりゃあもう…、「う〜ん」でっせ。

冗談はさておき、着用の方法と共に、T.P.O.によってウダンや何やらの色を変えた方がよいので、めやすとして表を作ってみたので参考にしてください。…いちおうのめやす、ですからね。

とにかく現地で揃える時や着用する時は、ホームステイの人か友人に相談にのってもらおう。さあ、あなたも coba.coba!!



8 完成仕上がり図

	ウダン	上着	サブット	サルン
Puraのオダラン	まっ白	白が基本 クリーム色 とかでもOK	黄色が基本	自由
成人式、結婚式、 子供のオンなどに 招かれた時	パティック柄か 色ものの金糸 入りなど	衿付きシャツ 何色でもOK	白、黄、黒 以外の何色 でもOK	自由
お葬式	なるべく地味な パティック柄か まっ黒	黒、もしくは ダークな色調 のもの	黒、もしくは それに近い色	なるべく 黒っぽい 方がベター

Ubud にもいた !! 幻の魔法使い

私は「椎間板ヘルニアになりかけ」というやっかいな持病を持っている。椎間板というのは、背骨を形成している脊椎と脊椎の間にはさまっている、ちょうどコインの形をした物体のことだ。私の場合はおへその裏側あたりの腰の部分にあたるひとつの椎間板が、背中側にほんの少しとび出しかかっているのである。これがある拍子に突然ぐいとび出してしまうと、そこを背骨にそって通っている神経の束を圧迫し、もうこの世のものとは思われない激痛をおこし、最悪の状態になるわけだ。そうなるとう簡単に治療して「はい、治りました」というわけにはいかず、へたをすると切開して、とび出した椎間板を云々、という大手術になってしまう。そんなことにならないように、日頃から姿勢をよくすること、かがんだ状態で重い物を持たないこと、など充分気をつけてなければならない。しかし、無理な姿勢を続けたり、疲れがたまったりしてくると、腰がしくしくズキズキ痛み出す。

かれこれ5年ほど前のある日、私はUbudのJL・Kajengのとあるホーム・ステイのベッドの上で、この「もう少しでひどくなる、とても危険な状態」におかれていて、寝ても座っても、どうにもならない痛みで七転八倒していた。もう何日も続く痛みにたえかね、これは這ってでも帰国して医者にかからねば、と考えていたところだった。そこへ友人のひとりであるバリ人、A.R.が「腕のいいトゥカン・ピジット（マッサージ師）を知っているから」と言ってやってきた。…と、その時、とても汚い身なりをした老婆がびっこをひくような歩き方でホーム・ステイの敷地に入ってきた。ホーム・ステイのパパはバリ語で「あっ、だめだめ、お婆さん、ここはお客さんがいるんだから」とあわてて老婆の行く手をはばもうとした。どうやらお金を minta（もらう）する、お乞食さんだと思ったらしい。その老婆は耳が不自由だった。声を出すことはできるようで、元気な大

声で「アーッ、ウーッ」と叫びながら、なぜか私のバルコニーの方にまっすぐ歩いてきたのだ。困っているパパに、老婆は私をゆびさし、「ウン、ウン」と言って指圧をするようなジェスチャーを繰り返した。そしてとうとう私の目の前にやってきて、部屋の中のベッドをさして、「横になれ」とうながした。その時、私を含めてその場に居合わせた人々すべて、「ああ、誰かがYのために呼んだトゥカン・ピジットにちがいない」と思い納得した。それにしても誰が呼んだのだろうか？老婆はすでに相当歳をとっているようで、かつけこう汚く、歯はシリヤ草で真っ赤にそまっていて、そのうえ身体が不自由で、にもかかわらず、異常なほど元気だった。

こうなりゃ彼女にまかせるしかない。まず老婆は、私の身につけている服や下着をすべてひっぱがしてベッドに横たわせたあと、台所からもらってきたココナッツ・オイルを数滴手のひらにとり、その手を胸のところにもってきてかたく目を閉じ、なにやら呪文のような、マントラのようなものを唱えはじめた。口はモゴモゴ動くのだが、聞こえるのは息のまじったうめき声のようなもので、早くも私はビビりはじめた。私の心配をよそに、老婆はいきなりカット目を見開いたかと思うと、猛烈な勢いで私をマッサージしはじめた。首のつけねから始まって、オイルをぬりながら、筋にそって信じられない力でぐいぐい押すのだ。元来どんな強い力でマッサージされても気持ちいい私は、だんだんウツトリしてされるがままにしていた。…と突然、彼女の手が、例の腰の患部の部分に及んだ瞬間、老婆は「ウーン、ムムム〜ッ」と叫びはじめた。彼女はそこを凝視したあと、「ここが痛いんだろう」と言わんばかりに私の顔を見つめた。ここで私の疑問がまたひとつ、なぜ彼女は患部をびたりと当てたのだろうか？誰も私の患部のことは説明していないのに。私は次第に、「このダドン（お婆ちゃん）、ただものではない…」と

思いはじめた。そうでなければ、私のためにこのダドンを呼んでくれた誰かが、あらかじめ事情を説明していたのだろう。患部をていねいにマッサージしたあと、下にさがって足のフトモモのあたりまで来たとき、再びダドンが叫び出し、ここを見ろという。彼女が指差した、私のヒザの裏側あたりを首をひねってのぞいてみると、彼女の指に押されて少しずつ移動していく小さなしこりのようなものがあった。手ぶり身ぶりの彼女の説明によると、どうもこのしこりが悪いモノの正体で、これは患部から出して、今だんだん足の先にむかって動かしている、ということらしい。ますます私の頭の中は「??」マークで占領されはじめ、最後に私のカカトから、「ウンッ」と言って彼女がそのしこりを外に出してしまった時は（もちろん外に出たモノは目に見えないのだが）、さすがの私も背筋がゾーンとなっていた。

再び全身をくまなくもみほぐしたあと、彼女はいきなりベッドの上によじのぼってきて、私を横向きに寝かせたかと思うと、上側の私の腕を後方におもいきりひっぱりながら、その逆方向に、私の腰を足でふんづけて押し倒した。あっという間のできごとだった。「ボキボキボキボキボキボキボキッ!!」とさまざま音が響いた。そして反対側をもう一度。何が起こったのかよくわからなかった。一見、ただ整体まがいのことをやったにすぎない。しかし!!「起きてみろ」とうながされてフラフラと立ち上がった私の腰には、もう痛みの「い」の字も残っていなかったのだ!!日本で同じように患っていた時、何週間もかけて電気マッサージを続け、シップを貼り、コルセットをつけてやっと治した私の腰を、ダドンは一時間で治してしまった。それも完治である。きつねにつつまれたようにポーッとしている私の身体のまわりを、火をつけた線香をぐるぐると回し、アゲン山の方向にむかってスンバヤン（お祈り）して彼女の儀式は終了した。「お礼は多くて5千だよ」とい

うバリ人の忠告を無視して、私は2万ルピアを彼女に差し出した。感謝してもらえないほどだった。後日、再び私をゾーンとさせたのは、あの日のダドンは友人 A.R. も誰も、私の所に来るよう呼んでいなかった、ということがわかった時だ。つまり、誰も呼んでいないのに私の所に来て、患部を当て、治してしまった、ということなのだ。結局そのダドンはいったい何者で、どこから来たのか、その時知るものは誰もいなかった。

数か月のち、私はUbudの南、ブンゴセカンに引越した。しばらくして、偶然にもそのダドンの家が、同じ村の南のはずれにあることがわかり、私はなんとなくホッ、と安心したものだ。あのダドンは実は魔法使いで、現実に存在する人間ではないのでは…とヒソカに思っていたからだ。

その後、私とダドンは何度となくお互いの家を訪れては、友好を深めている。見知らぬ外国人の私に、こんなお婆ちゃんが、こんなに力をこめて、暖かさをこめて、マッサージしてくれた。それは私にとって嬉しい驚異であり、今だにダドンは、私の「魔法使いのお婆ちゃん」なのだ。



イラスト：FUMIO

Bali, 自由を求めて

西条 俊

終章 終わらない旅

1992年 春。私は初めて Bali にやって来た。

すべてが新鮮に感じられた。真夏の開放感と清透な空気、夜の甘くけだるい臭いと、濃密な闇の時間、人々の曇りのない笑顔と自然の豊かさ。

私は Bali の虜になった。

キンタマーニ山に向かう途中、バスの窓から流れてゆく鮮やかな緑の風景を見ながら、こんな所に私の家があったら素敵だろうな、と夢想したことが1年と半年後に実現してしまったのだ。

私のコテージは“アビアン・サリ”と名付けられ、私はもちろん、すでに10組以上の人たちが利用している。その人たちのすべてが満足してくれているようだ。それは Bali の魅力のせいであり、UBUD 村の落ち着いた佇まいのせいであり、Putra 夫婦の親切さであったりしているのだろう。私は“アビアン・サリ”をもっと大きくし、プール付きの素晴らしいホテルにして、世界中の旅行者に嬉んでもらおうなどと夢を馳せたこともあった。しかし、今はこのままで良いと思っている。

私は Bali に事業をしに来たのではない。“日本”を持ち込みにきたのでもない。確かに Bali へ来るたびに新しい建物ができ、車の数は増え、様々な電化製品が家庭の中に入り、Bali は近代化されている。少しばかり淋しい気もするが、それはそれで自然な成りゆきで、それをどうこういう資格は私にはない。ただ私はそれを押し進めたいとは思わないのだ。

“アビアン・サリ”はこのままで良い。Ubud 村を愛する人たちのためのチョットした宿で良い。

私は多くを求めはしない。何故なら、それ以上のものを Bali から与えられ、それを自分のものにしたからだ。それは自由、魂の自由だ。何か大袈裟な言いかたになってしまったが、曾て Putra とバイクに相乗りし、明るい陽射しの中をどこまでも風を切りながら走るその瞬間、私は実感したのだ。この Bali の青い空の下に私の自由があることを。

人は生きていくうえで必ず何かを追い求めていく。それを夢とかロマンなどと言ったりする。私はその夢のひとつを実現した。だがそれは単なる夢ではない。私が生きていくうえで最も重要なテーマである“自由”というものをひとつの形にし、表現した。それが“アビアン・サリ・コテージ”なのだ。しかし、たいがい

の夢は崩れ去っていく。だから夢なのだが…。逆に私のようにスムーズに実現してしまうこともある。それは自らの意志と自然の流れが一致したからだ。この世の中は目に見えない様々なことが働いている。それは人間の力が及ぶものでもない。私はそれを謙虚に受け止めようと思う。ちょうど Bali の人たちがヒンズーの神々に畏敬の念をもつように。

私は Bali で再度私自身を発見した。朝、太陽が窓から光を射し込み生きとし生きるものが活動しはじめる。鳥は空を飛び歌を歌い、牛は草を食みそして昼寝する。私は長い間、このなにげない世界に自由があることを忘れていた。いつの頃か自由はこの現実にはなく、何かクリエイトすること、例えば絵を描くことの中にしかないと思い込んでいた。しかし、このさりげない世界に自由はあったのだ。Bali はそのことを私に教えてくれた。自由は単なる観念ではなく、大自然の中に身を委ね、そして私自身のなかの小さな自然の声を聞くことだと。歌うのもよし、眠るのもよし、食べるのもよし、笑うのも泣くのもよし、怒ることさえよしなのだ。すべてを引き受け、すべてを肯定する。それが自由へ到る道ということ。

日本に帰ればいろいろな現実が待ち構えている。以前の私ならばこの現実を重くハードなものに感じただろう。だが今は、これもまたひとつの現実にすぎず、この現実の中にも Bali ほどではないが自由はあると思っている。

人生は旅であると、よく言われる。

私も長い旅をしている…

この旅の意味が少しずつ解ってきた。それは“出会いと別れ”。最初に親と出会った。それから兄弟と出会った。友人と出会った。先生とであった。恋人とであった。妻と出会い、子供と出会った。そしてすべての者といつか別れる。それが旅。だからこそ私は、出来るならその旅が愛に包まれた旅でありたいと思う。魂の自由をもたらした Bali もその旅の通過点にすぎないかもしれない。

しかし、生きていくということは過去も未来もすべては現在にある。

だから現在を生きる私にとって、過去であり未来である Bali はまだまだ終わらない旅なのである。

合掌

1995.6

オダランで踊る時

YO YO

バリに長く滞在して踊りを習っていると、オダランで踊らせてもらえる事があります。これはいつの日かオダランで踊るやも知れぬあなたへの、私の経験した事から気付いた心得をいくつかお知らせしようと思います。

オダラン出演の心得

【1】 どんなに気が急いでも着替えはゆ〜っくりやること
バリ舞踊の衣装は見た目よりもかなりきついものです。ゆっくりと座る場所もない程、雑然とした楽屋で、伸縮性の全くない衣をギリギリ巻きにされて、(おまけに頭はクシ刺し状態でガンガンする事もあるし)長時間待つ事は拷問に等しく、踊る気力が失せる事も珍しくありません。ゆ〜っくり、ゆ〜っくり、出来れば出演直前に着替えるようにしましょう。尚、衆人監視の中で着替えをしなければならぬ事は覚悟しておいて下さい。

【2】 ステージを確認しておくこと

往々にして地面の上に薄いカーペットを敷いた程度の場所がステージになります。足元のでこぼこに気をとられて、踊りが散漫になりがちです。予めどの辺りがへこんでいて、どの辺りが出ているのか、開演前に調査しておくのがベターでしょう。カーペットの継ぎ目に充分注意して下さい。足をとられて転びかねません。又、場所によってはどこが客席から見ると正面になるのか、解らない様なロケーションのステージもあります。これも予め確認して下さい。気をつけないと、客に背中を向けたまま踊ることになります。(私がやりました)

【3】 楽団を信用しないこと

ガムラン隊がどんなに素晴らしい演奏をしようとも、練習に使っていたテープと同じ演奏をするとは限りません。曲のテンポは言うに及ばず、時として曲の構成さえ異なる場合があります。この場合はアドリブを入れる事になりますので、ステージ上で立ちつくす事のない様に、色々な可能性を想定してごまかす手段を練習しておいて下さい。

【4】 恥は何度かいても同じだ、とあきらめること

一度オダランで踊ると、あなたのバリ滞在中に先生と関係の深いグループが他のオダランに出演する際には「又、踊るよね?」と誘われる事でしょう。もし前回ステージで転んだり、客に背中を向けたまま踊り通す様な取り返しのつかない大きな間違いをしていたとしても、この誘いは有り難く受けて下さい。一度断れば次から声をかけてもらえなくなるかも知れません。何度も恥を重ねる内に上手になってくるものだと信じ、せめて同じ間違いは繰り返さない様に、日々精進しましょう。

P.S. オレグの間違ひはラキのせいにしてしまおう。



Warung (ワルン)

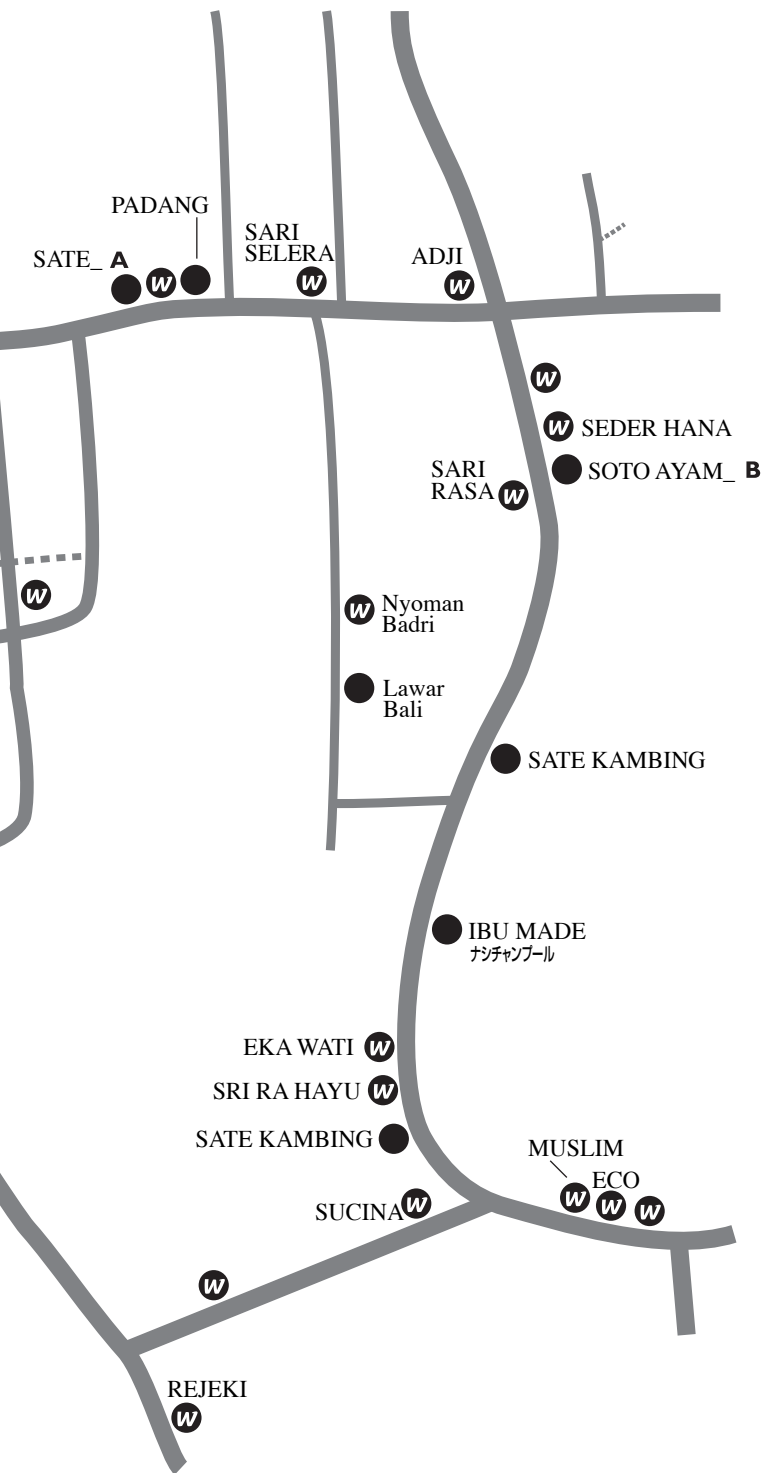


ジャジャーン!!

ず〜っと以前からデータを
集めていたとっておきの情報
【UBUD・ワルン・マップ】です。
どのガイド・ブックを見ても、
ほとんど観光客向けのレストラ
ンしか紹介されていないことに
不満を感じていたあなた。これ
で今日から食事は、安くておいしい、地元のヒ
ト感覚で楽しめますよ。ここにあるワルンの
数々、実はこの中の多くが看板も出ていなければ、
メニューも出ていない、まったくツーリス
トには知られざる存在なのです。でも、本当に
ホントーのバリの、そして UBUD の味を知り
たい方は、こんなワルンで食べるに限ります。
「こんなおいしいものを、秘密にしておくなん
て、UBUD の人達ははずい」と思ってしまう
ほど、特にレストランで味けのないナシ・グレ
ンを食べあきた人など目からウロコ、ポロリで
す。このマップのひとつひとつ、何がいくらで
食べられるかは、あえて説明してありません。
中には 300 ルピアで食べられるカレー味のブ
ブール（おかゆ）やティバット（ガドガドの簡
単なやつ）もあれば、最近の物価高で値上がっ
てしまったナシ・チャンプルーもあります。ど
うぞ自分の足で、目で、舌で、お気に入りのワ
ルンを見つけてください。さあ、これであなた
の Ubud 滞在中のエンゲル係数はかつてないほ
ど低くなることまちがいなし。そのうえ、おい
しいんだから、もう文句なし!! あなたの「こ
この、これがおいしかった」etc 情報を待っ
ています。



C:Babi Guling



A:Sate



B:Soto Ayam



D:Blah Batuh

とっても不思議な味 “RUJAK”



村の小さな屋台で売っている駄菓子の中に、とっても不思議なキャンディーを見つけました。名前をNANO-NANOと書いて、オレンジ色のハートマークのパッケージがかわいいですが、問題はその味。パッケージのコピーに「MANIS, ASAM, ASIN」と書かれている。「甘くって、酸っぱくて、塩からい」と要するに、そういう味。なんだか人生の教訓のようなフレーズです。甘酸っぱい味は、わたし達にとってポピュラーですが、それに「塩からい」が加わると、どんな味になるか想像がつかますか？ このキャン

ディーはインドネシアではとってもポピュラーなものです。ほんとおいしいかな？とっていたら、なんとNANO-NANOを上回る不思議な味の食物がありました。それはRujak。さすらいの屋台シリーズ第三弾です。バクソやタフと同じように、移動式屋台で売りに来ます。このルジャックもインドネシア全国でたいへんポピュラーなおやつとして人気があります。簡単に言ってしまうと、フルーツ・サラダなのですが、これがなんと「甘くって、塩からくって、酸っぱくて、辛い」という、頭がパニック状態になりそうな味してるんですよ。さて、どんなものかという、屋台をとめて注文すると、まず、あらかじめ皮がむいてあるフルーツ各種を、おじちゃん器用に一口サイズに切って、小皿に盛ってくれます。ウォーター・アップルとも言われるジャンプー、青リンゴ、パイナップル、マンゴ、これらはまだ熟していない、すっぱ〜いものだけを使います。そしてまだ固くて甘くないパパイヤ、きゅうり、バンゴアンというシャキシャキした歯ざわり

のイモの一種も加えます。これだけ書くと、なんだホントにただのフルーツ・サラダじゃんと思うでしょう。でもここからがミソ。この上にトロリとかけてくれるタレがくせものなのです。アッサムと呼ばれるすっぱい実とヤシからとれる赤砂糖、それに塩をまぜてねったものですが、これが



甘くて、酸っぱくて、塩からい。そして、それに添えてくれるトラシ（エビの塩辛のような調味料）と唐辛子のたっぷり入った辛〜いサンバル。これがルジャットの味の秘密。



エナちゃんは昔、この不気味なタレが、どうしても恐ろしくて、というよりは、その味が理解できなくて、しばらく遠慮していた時期がありました。でも、一口、二口、シャリシャリと食べはじめて、結局これがまあ、クセになっちゃうんです。はじめは混沌

としていてよくわからなかった味が、知らない間に、なんとなく好きになってしまう。最後にはとっても好きになってしまう。なんだか奥の深い食物ではありませんか。読者のみなさんも恐がらず、一度挑戦してみてください。一度食べたらパニック、二度目はまだちょっととまどいがある、三度目は反発しながらもなんとなくENAKで、四度目は…。そして、そうやってあなたもインドネシア大好き病の深みに少しずつはまってゆくのです。



↑上の板が左右にスライドする様になっている。↓



ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK

エナエナこぼれ話
マンゴスチン

Wayan Ely Okawari

さて、ルジャットと言えばフルーツフルーツと言えはマンゴスチン。（ちよつと無理がある？）乾期の今はなかなかお目にかからないけど、旬のマンゴスチンと言われるだけの「果物の女王様」と言われるだけの事はあると思います。おいしーもん。私が初めてこのマンゴスチンにお目にかかったのは、Kutaのホテルのウエルカムフルーツバスケットでした。お上品にいろんなフルーツがデコレションされている中、当時は名前も知らなかったこの果物を手に取り、ナイフを入れてみました。薄皮の下は紫色の果肉…。どれどれと口に入れるやいなや、「げっ、しぶっっ！」そりゃそうです。マンゴスチンはさらにその中の真白い部分を食べるんですもんね。最初失敗はしたもののこの上品でジューシーな味に魅せられて、その後、旬の時期にBaliに行った時は、市場でキロ単位買っています。ちなみにこのマンゴスチンの食べ方って知ってますか？丸のままのマンゴスチンを手に取り、そのままアーメンをする要領で手を組み、指の方がへた方向になる様に包んで、組んだ手の平をやさしく「クツ」と力を入れます。するとバクツと割れて、中に真白い果肉が「食べて食べて」と現れます。これをハグハグジュルといただきます。あー、たまらないっ！次の雨期が待ちどおしいね！

第3章 感涙

朝、やたら賑やかな車の排気音で目が覚めた。どうもホテルの位置する坂の下の通りを、相当数の車が往来している様だ。従業員に聞くと、ウブドの中心部に朝市が立っているのだ、と言う。興味がそそられたので、これ幸いと忘まわしき朝食を辞退して出かける事にした。果物と甘いものが苦手な私にとっての、フルーツの盛り合わせとたっぷりジャムのトーストは拷問に等しい。

朝市周辺は異常な熱気に包まれていた。往来をベモが激しく行き交う。クラクションの叫び、怒号。気の弱い奴なら立ちすくんでしまいそうな勢いだ。臭気も物凄い。土地の女性が使用する香油、どうやって食べるのか皆目見当もつかない果物、どんな種類か分からないが、とにかく丸裸になって逆さ吊りにされている鳥、これもなんだか分からないが、何かの動物の肉（亀か？）、蠅がわんわんたかっている魚、人いきれ、そしてベモにでも轢かれたのであろう、犬の死体。これらの匂いが渾然一体となり南国の湿気と気温に増幅されて鼻を直撃してくる。入り口から10メートル程入っただけで頭痛がしてきた。足元はそれぞれの売り場から流れ出して来る肉汁やら血やら果汁やらで濡れている。通路は狭い。人一人がようやくすれ違える程度だ。アメ横をぐっと小さく、密度を濃くしたと思えば良い。当然、観光客の姿は余り見かけない。いや、全くいなかったかな。

ホテルに戻りゆっくりしてから荷物をまとめてチェックアウトする。坂を下り切った所にあるレストランでサンドウィッチとビンタンのランチを摂り、レジで財布を出そうとしてポケットに手を入れたら、ホテルの鍵を持って来てしまった事に気が付き、やむをえず坂を引き返す。かなりきついぞ。

次の滞在先までは5キロ程ある。ちょっとこの荷物を持ってこの暑さの中を歩ける距離ではないな、と思いながらとぼとぼ足を運んでいると、おり良く白タクの運ちゃんが声をかけてきた。

「トランスポートでっか？」

「そうだ。（地図をみせながら）ここ迄行きたいんだけどな。」

「んー、遠いでんな、5000ルピアでおますな。」

「ブー、5000ルピア出したらシャトルバスでクタまでいけるぞ。3000ルピアってとこだな。適正価格だろ？」

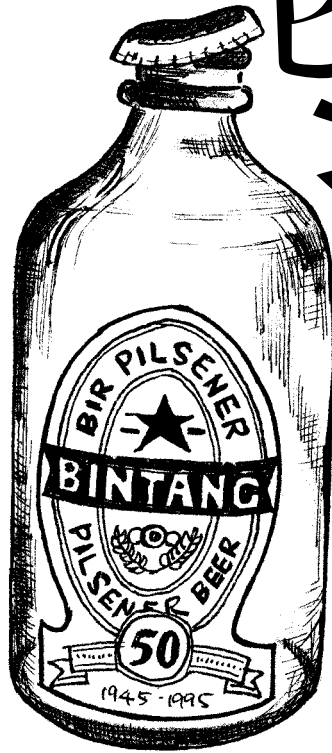
「旦那、それは殺生て言うもんでっせ、シャトルバスには何人も乗ってるでっしゃろ。4000で手を打っておくんははれ。」

「シャトルバス程いい車か、これが。しょうがねえな。あと少しだけ親切心に乗せだ。3500ルピア。これがボーダーラインだ。」

「かないまへんな。ま、ええでっしゃろ。」

滞在先に着くとウリが出迎えてくれた。ニョマンはチャンディーダサに釣りに行ってると言う。

南部
弘



ビンタン
酒
船
集

2

「朝の4時に起きて行ったのよ。たまに釣れる事もあるけど、だいたいクーラーボックスは空で帰ってくるのよねー。今晚のおかずは任せとけ、なんて言ってたけど、あんまり期待できないわ。」

ビールを飲みながら暫くのんびりしてから再び町に出た。

カフェでビンタンを二本飲み（我ながら良く飲む）滞在先に戻る途中で、ヘーイ、ヒロッシュ、と声をかけられた。見るとカフェの従業員、髪長いブロックが数人の友人達と道端で酒を飲んでた。こっちに来いよ、一緒に飲もうぜ、という誘いは、酒好きのこの私が断れる訳無いだらう。有り難く合流させてもらう事にした。

髪長いこいつが俺の弟、スパンキーだ、と紹介を受ける。本名か、と聞くと、まさかそんな訳ないだろう、こいつはバンドをやっていて、いわば芸名だ、と言う。バンドをやっている奴に欧米風のニックネームをつけるのは日本だけじゃなかったのか。他の奴らの名前は、例によってワヤンやマデやニョマンだったので忘れてしまった。

彼等が飲んでたのは、ダブル・キーウィーという現地の甘いウイスキーをコーラで割ったワイルドな奴だ。それもウイスキー一本に対してコーラはたった二本の強烈さで、一回で飲み切ってしまうらしく既に混ぜてあった。勿論、氷なんかない。ぶはー。

「ヘーイ、ヒロシユ、ぐーっといけよ、ぐーっと。」
「日本じゃ学生がよくこんな飲み方をするな、イッキっていうんだけど。」

「ヘーイ、イッキ、イッキ。」

言葉の響きが気に入ったらしく、誰かにグラスが回るとイッキ、イッキの合唱だ。変な事教えちゃったな。

お前も飲め、とワヤンだかマデだかにグラスを渡すと、俺は飲めないんだ、という。

「酒飲めない奴の事を、日本じゃ、ゲコっていうんだぜ。」

ヤモリの事をバリではゲコと言う。こいつはもっと受けた。

「ヘーイ、ゲコ、ゲコ。」

どこからか誰かがギターを持ってきた。スパンキーと私がポップ・マーレイやクラブトンを弾くと皆歌う(サビだけ)。囃らずも鳴り物入りの大宴会になってしまった。

面白そうな奴が通りかかると、ちょっと飲んでけよ、と、声をかける。途中、オランダ人の女性観光客が合流した。早速、スパンキーが口説きにかかる。

「俺、ガールフレンドが欲しい。最後にやったのがもう2、3か月前になるんだ。」

「悪いけど、私、貴方を助けてあげられそうにないわ。」

一発で断られちゃった。公衆の面前、日暮れ前の天下の往来で初対面の女性にこれ程露骨に迫る奴も珍しい。張り倒されなかつただけでも儲けもんだ。

「スパンキー、お前もうちょっと優しく口説こうって気にならないわけ？」

「そうよ。私だってもうちょっと優しく口説いてくれたらどうしようかな、って思ったかもしれないわよ。」

スパンキーが優しく口説き始まった。

今更遅いよ。結構飲んでしまったらしく、気がついて暗くなり始まっていた。今晚見る予定のパフォーマンスの開演時間まで余り時間がない。ホテルには戻らず会場に直行する事にした。

会場のクトゥ寺院集会所には、竹製の椅子が並べられていた。客の入りは半分弱、約50人と行ったところか。一番前の席が空いていたので座る。グループの名前はスマラ・ラティー。『スピリット・オブ・バリ』というプログラムだが、どうもバリの民族芸能をかいつまんで見せる様なタイトルで余り期待は出来そうにない。

開演時間を少し過ぎたところで、入口からバラガンジュールに先導されて出演者達が入場してきた。なかなかの演出である。演奏のクオリティーもいい様だが、バラガンジュールだけでは良くわからない。

出演者全員がステージ上から客席に挨拶をしたあと、ダンサーは舞台裏に引っ込み、演奏者はステージに据えられた楽器の前に座る。祭司役が出て来て演奏者と楽器、そしてステージを聖水で清める。

いきなり、ガンサのきらびやかな音が静寂を切り裂くかの様にして演奏が始まった。粒の細かい異なったフレーズを単発的に送り出す。フレーズが区切れると

残響のみが会場を包み込む。と、思う間もなく、柔らかな音色のレヨンのみが目にも止まらない速さで演奏を始める。息をもつかせない展開だ。鑼、太鼓が演奏に加わって音圧が客をたたみこんで来る。ぐいぐい食い込んでくるシンコペーションに変拍子の嵐。黄金色の音の洪水。そして大きなうねりを持ちながらも一糸乱れぬアンサンブル。もの凄いドライブ感、圧倒されながらも身体が自然に動いてくる。

本当にびっくりした。酒の酔いも完全に覚めてしまった。珍しい楽器の演奏を目の前にして興味を引かれているだけじゃない。音楽の存在自体が素晴らしいのだ。演奏者の意気込みとテンションが音を通して伝わってくる。勿論、完璧な演奏なのだが、完璧以上の説得力と凄味があるのだ。他の客の多くは訳も判らずただ唾然としているが、この俺にはわかる。この素晴らしいさを理解出来ないまでも、認める事の出来ない奴は音楽を聞く資格が無い。

演奏は二曲目に突入していた。踊り手が出てきたようだが、どんな踊りか良く判らん。目の前がなんだか曇ってきた為だ。お恥ずかしい話だが、自分でも気がつかない内に涙が出ていたのだ。

1時間半程のステージはあっという間に終わってしまった。今まで数えきれない位のアマチュアから外タレのステージを見てきたが、殆どはステージの途中で飽きてしまう。こんな事は始めてだ。私は完全に興奮していた。演奏者の一人を捕まえて、是非リーダーに合わせてくれ、とお願いする。

暫くして私よりも若いと思われる男が出て来た。彼は、リーダーのアノムだ、と名乗った。私は握手を求め、インドネシア語は分からないから、英語で話す無礼を許して頂きたい、それも上手く話せないのだが、と前置きしてから、熱い思いをでたらめな英語でまくしたてた。

「俺は前からガムランに興味があった。随分前からガムラン音楽のレコードを聞いていたし、日本から来る直前もバリの音楽のCDを十枚以上も買って毎日聞いていた。こっちに来てからは未だ2、3回しかパフォーマンスは見えていないが、ガムランに限らず今日程ステージに感動させられた事はない。とにかく、この気持ちを何らかの形で次に繋げたいんだ。どうしたらいいか教えてくれ。」

「そうか、有り難う。力になれるかも知れない。よかったら家を訪ねて来てくれ。」

彼の住所を聞き、必ず行く、と約束。礼を述べて会場を出た。今夜は眠れそうに無い。

第4章 だって、食べたくないんだもんっ！

甘いもの関係が一切苦手な私にとっては、新しい滞在先の朝食もやっぱり駄目だった。完熟の立派なバナナを縦に半分切って衣を付けて揚げた上に砂糖を

たっぷりかけたらどんな味になるか知ってるか。殺人的な甘さになるのだ。それが丸二本分あるのだ。オエー。

コーヒーとフルーツ少々で退散し、テラスで煙草を吸っていると、ダニエルが、ジャパニーズ、遊ぼうよ、と英語で言って来た。未だ5歳にしかならないのに、バリ語、インドネシア語、ウリの母国語であるドイツ語、そして英語までも話すのだ。たいしたものだ。ウリは、まだ英語は上手く話せないのよ、なんて言っていたが、どうしてどうして私なんかよりは立派に意思を伝えられる。滞在中に、御免ね、ジャパニーズは外国語よく分からないから、と言って何度彼を苛立たせた事か。

最初はブンコス遊び。つまりおままごとだ。3段程のプラスチック製の小さい棚が彼のお気に入りのワルンである。

「ジャパニーズ、何にしますか？」

「んー、プライス・リストを見せてください。」

げっ、ナシ・ゴレンだけ桁違いに高い。どうやらダニエルもナシ・ゴレンが好きな様である。(なに本気になってんだ、俺は。)

「ナシ・ゴレンを下さい。」

「はい、どうぞ。」

葉っぱのナシ・ゴレンを紙に包んで渡してくれる。

「お味はどうですか？」

「んんんーっ！とつてもバゲース！」

ブンコス遊びの次は中庭に出てサッカーだ。途中ハーフタイム(つまり私の休憩)を入れながら30分程。どっと汗をかきながら走り回っていると、使用人が笑いながら、

「つかまったな。」

と言ってきた。彼もよくつかまるらしい。

サッカーの次はキャッチボール。途中ウリが出て来て、無理して遊んでくれなくてもいいのよ、と言って来たが、大丈夫、子供と遊ぶのは好きだから、とかわしたつもりをダニエルは聞いていたのか。これはダニエルが大暴投をしてボールが見つからなくなるまで延々と続いた。本当に子供はタフだ。

喉が乾いたので冷たい物でも飲もう、とキッチンに行く。このホテルは客が好きな時にキッチンの冷蔵庫から飲み物を取り、チェックアウト時に申告するシステムをとっている。ダニエルがファンタ、私がビールをテラスで飲んでいると、ウリがやってきてダニエルを叱った。

「ダニエル、ファンタを飲む時にはママに聞いてからにきなさい。」

「いや、汗をかいたから俺がいいって言っちゃったんだよ。ごめんごめん。」

「もう、この子ったら、お客さんをそそのかしては勝手にファンタを飲むのよ。」

賢い奴だ。

場所を私の部屋のテラスに移してゲームボーイで遊ぶ。たっぷり3時間も遊んだらどうか、良かったら昼食を一緒にどう、とウリが言って来てくれたので有り

難くご相伴に与かる事にした。ダニエルは余り食が進まないらしく、お喋りをして誤魔化している。

「ダニエル、お喋りはいいからちゃんと食べなさい。」

「そうだそうだ。ちゃんと食べないと大人になれないぞ。」

「だって、食べたくないだもんっ！お腹いっぱいなんだもんっ！」

朝食の後にキット・カットを5つも食べたんだそう。それじゃあ無理だな。

しょうがないわね、もういいわよ、と解放されると、再び、遊ぼうよと言ってきた。そうしてやりたいのは山々だが、出かけなきゃいけない用事があるから又明日ね、と納得してもらった。昨夜見たスマラ・ラティエのリーダー、アノム氏の家を訪問するのだ。

5キロ近く離れた彼の家に着くと、使用人が出てきて、あいにくデンバサールに行っていて不在だと言う。明日の午前中なら必ずいる筈だと言うので、名前と『明日必ず来る』というメッセージを紙に書き、渡して貰う様をお願いしてその場を後にした。

ちょっとのつもりで戻るにはホテルは遠い。その辺をぶらぶらしたり通りのカフェでビントンを飲んだりしながら時間を潰す。今夜見たいパフォーマンスが上演される会場は滞在先からは5キロ近くも離れているし、滞在先近辺には白タクもないのだ。

昨日ブロック達と飲んだ辺りをたまたま夕方に通りかかったら、いたいた。まだ酒こそ飲んでいないものの、既に挙動不審だ。しっかり見つかってしまった。

「へーい、ヒロツシュ、来たなー。」

「ああ、余り時間がないんだが、飲むか？」

「エーイ、飲まいでか。イッキ、イッキ。」

「じゃあ、これで買ってきてくれよ。」

「ダブル・キーウィーだな。」

「ああ、頼む。」

ブロックがオートバイでダブル・キーウィーを買っている間、他の奴に近所からビントンを買ってきてもらい、一足先にみんなで腹の下ごしらえをする。誰かがギターを持ってきた。この日以降、私がこの付近を通ると、ブロックやスパンキーがいようがいなからうが、酒を飲んでいようがいなからうが、どこからともなくギターが現れて最低10分は足止めを喰う事になる。急いでいる時はわざと遠回りをしていた程だ。

昨日と同じくボトル1本を2本のコーラで割り、5、6人でわいわいイッキだのゲコだのやってる内にすっかり日が暮れてしまっていた。もう行かなければならない。

この日私が選んだパフォーマンスはワヤン・クリッ(影絵芝居)である。芝居も面白いのだろうが、私の主な目的はグンデル・ワヤンと呼ばれる伴奏音楽の方であった。CDで聞いていたが、とてもリリカルな響きの音楽だ。

会場は中級ホテルの半野外の小さいステージである。用意されたスチール製の椅子は全部で80脚程か。私が行った時には既に半数以上が埋まっていた。

縦が1メートル半、横が2メートル程の白いスクリーンの後ろで宙吊りになった石油ランプが揺れている。ダラン（人形使い兼語り部）がスクリーンの裏側に革で出来た人形を左右に並べて置いていく。ダランは一人で全ての人形を操るのだ。他には人形を手渡す助手が一人だけ。演奏者に楽器はどうしたんだ、まさかテープに合わせて影絵だけを見せる訳じゃあなかるうな、と思っていると、紫色の布をかけた楽器を大事そうに肩に乗せて4人の演奏者が並んで登場した。と、思う間もなくスクリーンの裏手に入って行ってしまった。これじゃあ演奏している所が見れないじゃないかと思ったが、進行役の男が簡単なストーリーの内容を説明し、もしどの様にして人形を操るのか見たければステージの後ろで見て差し支えない、と言う。

演奏が始まった。何とも清らかな調べだ。まるで小さい宝石がはじけながら転がって来る様だ。ダランが人形を使い始めると、観光客達はフラッシュを焚きながら熱心に撮影していたが、そんな事してもただの白いスクリーンしか写らないぞ。物語が多少展開したところで私はバックステージに移動した。

ガンサを一回り以上小さくした様なグンデルは、二台づつが向かい合って並んでいた。驚いたのはその演奏法だ。両手にマレットを持ち、不協和音になるべき直前に叩いた二つの鍵盤の振動を左右各々の手首で止めているのだ。出ている音の優しさの裏にこんな凄まじい、とても人間業とは思えない熟練の技術があったとは。やはり、鍛練の結果完成されたものはそれが何であろうと美しい。

充分堪能して帰る途中、遅めの夕食を摂る為にホテルの近くの『影武者』というジャパニーズレストランに入る。やはり日本人の姿がちらほら見える。

断じて言うが別に日本が恋しくなった訳ではない。ウブドでは殆どのレストランが早い時間に店じまいをしてしまい、10時を過ぎると開いている所を見つけるのが困難だし、ここから先、ホテル迄の500メートル程の間に他のレストランが有ったかどうかとも定かではなかった。

ビントゥンと軽い食事をオーダーする。ちょっと落ちついたところで、一つ向こうのテーブルで賑やかにやっている3、4人の団体に挨拶をする。旅先で内気になったり気取っていたら面白くない。旅の恥はかき捨て、というのとはちょっと違う事をご理解頂きたい。オージーとバリニーズのハーフだと覚しき、40歳位の長髪の男がその場を仕切ってるらしい。意外にも随分と流暢な日本語を話す。

「みなさん日本人の様ですけどバリにはどの位なんですか？」

「みんな、それぞれよ。彼女は3ヶ月になるかな。」

「随分日本語がお上手ですね、ミスター・ロングヘア。」

「だって日本人だもの。」

「そんな事言ったら、日本人の私から見れば違うことはわかりますよ。」

「もう、あんまりウブドに長い間いるから順応しちゃったのかもしれないね、日本を忘れた日本人。」

「本当に？」

「本当だよ。」

私はクタで散々ジャワ人と間違えられたが、ここにもいたぞ、無国籍人が。

彼の名前はイトウさん。この店のオーナーで、前は名古屋でエレクトリック・レディーランドというライブハウスをやっていたと言う。良くライブハウスに出演していた私は、勿論、店の名前は知っている。

話をしている内にスマラ・ラティーの名前が出て来た。

「いや、実は私、昨日見たんですが、余りの素晴らしさに涙が出ちゃったんですよ。」

「へえ、そうなんだ。おーい、ユミちゃん、ちょっとこっちにおいで。」

共同経営者らしい、20代後半の女がやって来た。「彼がね、スマラ・ラティーを見て感動して泣いちゃったんだって。」

「でしょでしょでしょ、いいでしょ。」

彼女はスマラ・ラティーの大ファンらしい。殆どミナーの域に達している様だ。他の常連客も殆どがスマラ・ラティーを気に入っているらしく、暫く話に華が咲く。面白いものだ。似た趣味をしている者は自然と同じ所に集まって来る様になっているのか。

「パリを踊った男の人、かっこ良かったでしょ？」

実は良く覚えていないのだ。プログラムを読む余裕もなかったし、目も霞んでいたし。

「あのね、アノムっていったってとても有名なダンサーなのよ。」（実は、この時はアノム氏は踊っていなかった。）

「俺、リーダーのアノムって人から家に来いって言われてるんだけど同じ人？」

「えーっ、えーっ、えーっ！」

そんな調子で盛り上がっていたら真夜中近くになっていた。話をしながら結構飲んだ様で適度に気持ちがいい。明日はアノム氏の家に午前中に行かなければならない。又、近い内に邪魔させて貰いますと言い、店を出て帰路についた。

第5章 バリの犬は怪獣だ。

バリに来てからというもの、毎日のように甘い朝食にうんざりさせられ続けて来たが、今日の朝食はいけそうだぞ。フルーツの盛り合わせ（これはどこでも同じ）にジャッフルだ。バターのいい香りが立ちのぼって来る。いっただきまーす。うわあ、中身はバナナだ、ゲロゲロゲロゲロ（※10回繰り返して下さい）。

バリ人は毎朝あんな食事をしているのだろうか。例えば我々が日本国内の観光地の旅館に泊まったと仮定しよう。朝御飯に出て来るものといえば、白いご飯にみそ汁、漬物、玉子焼きもしくは生卵、魚の干物、味

付け海苔に、あとはせいぜい納豆といったところだろう。山の方にあるか海の近くかによって多少の違いはあるだろうが、いくら特産品だからといっても愛媛で蜜柑をご飯に炊き込むという話は聞いた事が無いし、青森でみそ汁にリンゴが浮いていたなんてのもちょっと想像できない。(なんだか具合が悪くなってきた。)という事は、朝食にバナナをふんだんに使うのはバリでは当たり前で、別に不自然ではない、という事になる。

とにかく口に入れた忌まわしき一齧りだけは大量のコーヒーで流し込んで、早々にダイニングから逃げだした。いつまでたっても完熟バナナの甘酸っぱい香りが胃袋から鼻に抜けてくる。フン、フン、フン。

ふんふん言いながらマンデイをしてホテルを出た。先日見たガムランのグループ、スマラ・ラティーのリーダー、アノム氏の家を訪問する為だ。もう気分は充分に高まっている。

アノム氏の家に着くと本人が出迎えてくれた。良く来たな、と言い、玄関先の10畳程のロビーのソファーに案内される。

「さあ、どうしようか。」

「何か勉強をしたいんだが。」

「踊りを教えようか。」

「それも悪くはないが、出来たら楽器を習いたい。何処に行ったらいいだろう。」

「俺が教えてあげられる。」

「ここでか？」

「そうだ。で、いつからはじめようか。」

「今。」

「今すぐ？」

「そう。今から日本に帰るまで毎日だ。残り10日も無い。」

「んー…わかった。こっちに来てくれ。」

母屋の横にあるあずまやにはガンサと太鼓、その他の小物が置いてあった。迷わずガンサを指さす。

「これだ。こいつを習いたい。」

「課題曲は何にする？レゴン、パリス、トペン…」

「俺にはどれがいいかわからないが、帰るまでには一曲弾ける様になりたい。任せるから余り難しく無いのを選んでくれ。」

「じゃあ、パリスにしよう。ここに座れ。」

アノムは私の正面に座る。つまり彼から見れば鍵盤が逆に並んでいる事になる。

「スマラ・ラティーで使用している楽器は特殊な規格で、この二つの鍵盤はパリスでは使わないんだ。」

2枚の鍵盤を指さす。鍵盤の数は合計12枚。音の低い方から順に叩いてみると、合計2オクターブあり、下の1オクターブ目は沖縄民謡に近い5音階で、上の1オクターブは聞いた事も無い7音階である。こいつは思っていたよりも苦勞する事になりそうだ。

「これがパリスの第一のメインフレーズだ。」

いきなり演奏の仕方も解説しないで弾きはじまった。私はある程度見て知っていたから良かったものの、直前に弾いた鍵盤を左手でミュートをしながら次の鍵

盤を弾く、という独特の演奏方を知らなかったらアノムはどうするつもりだったんだろう。

音を探りながら後を追いかける。やはりミュートのタイミングが難しい。それに1オクターブに出てくる音程が少ない為にどのフレーズも印象が似ており、なかなか覚える事が出来ないが、暗中模索しているだけでも充分楽しいし集中できる。

途中、何回か休みながら2時間少々。昼になったのでこまめにしよう、という事になった。この位の長さが丁度良い。これ以上やっても覚えた事を忘れてしまう。殆どの時間を基本的なフレーズの練習に使ったが、初日には上出来な方であろう。先生も、呑み込みが早い、と褒めてくれた。明日からも10時頃から2時間程度指導してもらおう事になった。

丁重に礼を述べアノム宅を後にする。朝食が食べられなかったせいもありかなり空腹だった。ホテルに戻る途中で昼食を摂ろう、とハヌマン通りのレストランを物色しながら歩いていると、

「ヘーイ、ヒロッシュ！」

え？ブロックとスパンキーだ。お前仕事はどうしたんだ、と聞くと、余り客も来ないんで今日は休みだ、と言う。

「ヒロッシュ、ダブル・キーウィー飲むか？」

やっぱり来たか。バリには日常的に酒を飲む習慣はないと聞いていたが、一体こいつらはどうなってるんだ？それにまだ昼間の1時前だぞ。まあ、いいか。

金を渡し例の物を買ってきてもらう。勿論、ピントンの洗礼とギターは欠かせない。

ブロック、スパンキー、それに私意外には殆どの奴は飲まず、何処からとも無くやって来てただ何となく座って煙草を喫ったり歌ったりしてる奴が多い。みんなそんなに暇なのかね？

ギターを弾いている私の指先をじっと見ている奴をからかってみる。

「ギター上手く弾ける様になりたいか？」

「なりたいたい。どうすれば上手くなるんだ？」

「簡単だ。爪が剥がれようが、女が隣に寝ていようが、女に振られようが、三日間飯にありつかなかろうが、親父に殴られようが、親父を殴ろうが、とにかく毎日4時間から6時間練習して、たまにはベッドに持ち込んで優しい言葉をかけてやる。これを10年間続けたら、俺ぐらいは弾ける様になるぞ。」

「やっぱり、いいや。」

2本目のダブル・キーウィーが無くなりかかった時にはみんな相当酔っぱらっていた。3時間程も路上で飲んでいただろうか。太陽の位置も変わり、木の枝が造る木陰を求めて何回も移動していた。

「じゃあ、俺帰るわ。」

と、立ち上がって見たものの、足元がおぼつかない。

気をつけてかえるんらろー、という言葉に送られて、膝をがくがく言わせながらもホテルにたどり着いてみると、宿の主人、ニョマンがホテルのゲスト全員とビールを飲んだりギターを弾いたりして宴会の真っ最中

だった。

「おーい、お前も来いよー。」

勿論、行くけどさ。大丈夫かな、俺。

私はクタで買ったウイスキーを持ってくる。馬鹿な話やら真面目な話やら（酔っぱらって世界経済の話するか、普通。）をしてる内に、ニョマンがもう一台ギターを持ってきた。レゲエやらブルースやら即興で作った曲やらをセッションしながら盛り上がる。ドイツ人のトーマスがリクエストする。

「デーブパープル弾いてくれ、デーブパープル。」

「次はエリック・クラプトンだ、エリック・クラプトン。」

そのうち、頭はぐらぐら、ろれつは回らず、（外国語しか通じない環境でろれつが回らなくなると、かなり面白い。）遂にはニョマンの頭が3つに見えてきた。

まるでキングギドラだ。時計を見ると既に6時になっていた。

「俺、昼頃から飲み続けてきついでからさー、ちょっと寝るわ。」

「7時半頃から俺の釣ってきた魚の料理でパーティーやるからな、起きて来いよ。」

「オーケー、もし起きて来なかったら蹴り入れてでも起こしてくれ。」

部屋に戻る。ベッドに横になる。
寝た。

（爆睡中：Don't Disturb）

目が覚めた。

もうそろそろ時間かな。それにしてもやけに静かだな、おまけに真っ暗闇だ。時計を見してみる。

11時。

げげげげ、インパクトの瞬間ヘッドは回転する、なんて馬鹿な事考えてる場合じゃないぞこれは俺は誰だここで何をしている俺は南部弘だここはバリで俺は寝ているニョマンが起こさなかったのか俺が起きなかったのか頭がぐらぐらするわ天井は回るわ天井で回っている筈のファンは止まって見えるわトッケーは鳴いているけど何回鳴くのかな何がどうなっているのか全然考えがまとまらないけどとりあえずこん畜生め。

とにかく、寝過ごしてしまった事は間違いないらしい。少なくとも一旦起きてウリ手製の魚料理を食べてから又寝て、食べた事を忘れてる訳じゃないのはこの腹の空き具合からも容易に察する事が出来る。

そうだ、今日は一食もまともに食べていないのだ。これはまずい。何か食べないと明日活動できないぞ。開いているかどうか判らないが、とにかく影武者まで行ってみよう。

まだ酔っているのかそれとも空腹のせいなのか、ふらふらしながらホテルを出て真っ暗な道を200メートル程歩いた所で、一匹の野犬が吠えかかってきた。

一匹が吠えると他の犬も同調する。ちょっとたじろいで足を止めたら、あつという間にその辺から集まっ

て来て、5、6匹の見るからに凶暴そうな奴に囲まれてしまった。後戻りする事さえできない。夜は犬の天下なのだ。奴等は月の光に目をぎらぎら光らせ、牙を剥きつつ、がうがう唸りながら輪を狭めて来る。勿論、周囲には誰もいない。

この時の恐怖がどれだけのものか理解できるか？本当にきんたまが縮み…いや、失礼。とにかく、滅茶苦茶に怖いのだ。クタでヤクの売人と喧嘩になりそうになった時の比じゃない。だいたい言葉が通じないし、こっちが弱気になっているだけに歩が悪い。それに私は基本的には動物愛好家であり、吠えられたくらいで犬を蹴飛ばす様な残酷な真似は出来ない。奴等にはそれが分かるのだ。

このまま待っていたって状況は悪くなる一方だ。どうにか撃退するしかこの場を逃れる手段は無いらしい。

仕方無い。覚悟を決め、クタで買った安物のショルダーバッグを振り回す。と、途端に肩紐が切れてバッグは暗闇の中に飛んで行ってしまった。

「あーっ！」

猛犬達は逃げて行ったが、バッグを振り回したから逃げたのではない。私がつっくりして大声で叫んだから驚いて逃げたのだ。

なにせバッグの中にはカメラ、現金、トラベラーズチェック、帰りの航空券、パスポート、果てはクレジットカードに至るまでのありとあらゆる貴重品が入っていたのだ。

えらいこっちゃ。大慌てでバッグを捜す。しばらくあたふたしたところで、水量の豊富などぶ川のすぐ横で見つかった。あと少し遠くに飛んでいたら危ないところだった。

最寄りのレストラン、影武者に着くと、『CLOSE』の看板こそ掛かっていたものの中からは人の話し声が聞こえて来る。

「すいませーん、誰かいますかー、何か食べさせて下さいーい。」

な、情けない。

幸いな事に、身内が集まって新しくウブドにオープンするブティックの外装を検討している最中だった。事情を説明して食べ物を出してもらおう。助かった。

「おにぎりでもいい？」

「いい、いい、理想的。」

「飲み物は？ビール…じゃなさそうね。」

「うつぶ。お水下さい。」



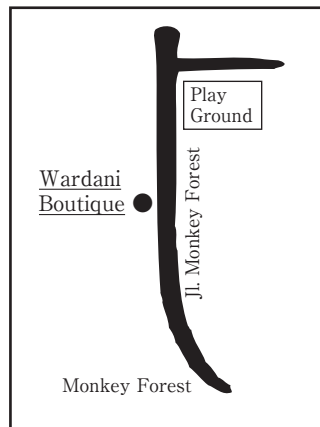
Toko ◇ BEST 店

Wardani Boutique

ジャワの特産品としてパティックは有名ですが、実はバリはイカット（手織りの布）の産地。だということは案外知られていないのではないのでしょうか。主な工房はヌガラ、ギアニヤール、クルンクンにあり、中でも色や柄の豊富な、クルンクンのイカットはとてもきれい。そのクルンクンから産地直送で売られているのが、ここワルダニ・ブティック。

手織りのコットン100%の生地はシャツを作っても気持ちがいいし、クッション・カバー、ベット・カバーにしても長持ちするし。カーテンや小物雑貨にもバグース。日本のカスリ調に似た生地もあるので、ゆかたなんかもできちゃうよ。生地はメートル単位で買えて、少しだけシルクもあります。サロンにするには女性2m、男性2.5mでOK。とにかく品数が豊富で、選ぶのに迷ってしまうほど。※一つだけ注意しないとイケないのは、洗濯の時には絶対に他のものといっしょに洗っちゃダメ。色が移ってしまいます。店内には正装用の金糸の帯やら、いろいろあるので、是非ご覧あそばせ。

Jl. Monkey Forest・UBUD・BALI TEL 975538

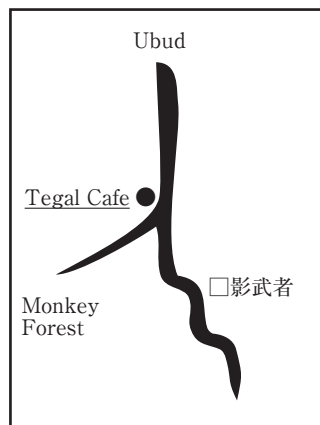


Warung ◇ 味な店

Tegal Cafe

以前、デンパサールに店を持っていたチャイニーズ料理店のおやじさんが、Ubudに移ってきて開店したのが、ここ、テガル・カフェ。なんといってもおいしい。美味。特にオススメは、鉄板じゅうじゅうで出てくるカンクン・ホット・プレート。土鍋っぽい雰囲気のスーフードのあっさり煮込み、クロップ・ポットは、とろ〜りトーフも入って、とにかくスープがゲロウま。二人分くらいあるので、寒い夜に Pacar（恋人）といっしょにどうぞ。バリ自慢の淡水魚、グラミは、ゴレン（揚げ魚）にしたらこれまた最高においしい。そしてボリュームも満点。その他、ビーフン・ゴレンは、米の粉でできたヌードルにエビや野菜が入って「もうホントにうみゃーでかんわ」と思わず名古屋弁が出てしまう。とにかく何を食べても味つけが絶妙で、奥深く、あきがこないのですよ。しかも、全体的にとっても良心的な値段設定で、こおんなオイシイものをこおんなリーズナブルに食べちゃっていいのお？…って感じです。パダン・テガルからブンゴセカンに向かう途中の三叉路のところに、ちょっと奥まっているので、がんばって見つけて下さい。ここはホント、超オススメ。ぜったい Coba（試す）ってみて!!

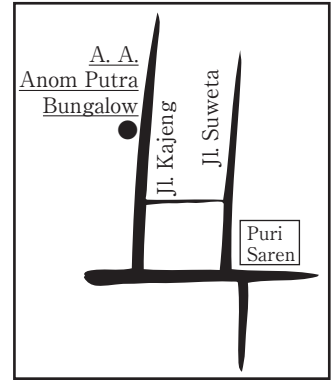
Jl. Hanoman, Padang Tegal. UBUD BALI Tel:974718 / Fax:974688



A. A. Anom Putra Bungalow

南部 弘

…と、いうらしい。完全なホームステイであるからして、こんな立派な名前があるとは、つい最近まで知らなかったのだ。場所は Cafe Lotus の横の小路、Jl. Kajeng を入って 300m 程だらだら坂を上った左側の 25 番地。今更断るまでもないだろうが、スマラ・ラティのリーダー、アノム氏の家である。同じ敷地内に、ちょっとしたバレ（小屋…かな？）があり、ここで踊りやガムランを習う事が出来る。ガイドブック等にも “Dance and Music Studio” と紹介されているので、習っている訳でもないのに人の練習を見物に来て勝手にあがりこむ不慮慮な奴等を含めて（身に覚えのある人は反省しなさい）実に多くの人が訪れるが、看板が出ていない為に、通り過ぎて右往左往している所を近所の人に連れてこられるパターンが多い。



使用人が宿泊している建物の 2 階のたった 2 部屋が、このバンガローの実態である。歩いてるだけでは判らないが、Jl. Kajeng のすぐ横は溪谷になっている。その傾斜地にこの建物は建っている為、ベランダからの眺めが素晴らしい。椰子の木の隙間から遥かにライステラスが望めるし、おおい繁った木の枝から枝にリスが飛び、運が良ければ着地に失敗して落下するのを見る事が可能だ。夜ともなれば、川のせせらぎをバックミュージックにホテルが舞う。お湯は出ないが、部屋自体はかなり広いらしい（比較できる程、他を知らないの）。清潔らしい（比較できる程、他を知らないの）。

しかし、この宿の一番の魅力は、バリの芸能音楽界において、積極的に活動を続けるスマラ・ラティ、及びアノム一家の本拠地である為、その関係の人々が多く出入りしており、そういった人達と知り合いになる機会がある、という事であろう。スマラ・ラティのメンバーのみならず、「あ、この人本で見た事がある。」と思う方々が玄関先で談笑しているのを見かける事もしばしばである。

基本的には、ここで踊り、及びガムランを習っている、もしくは習いたい人が泊まるのが理想であるし、又、部屋が空いているのなら、是非そうすべきであろう。一泊の値段がどうのこうのといったレベルでは計り知れない付加価値が、ここにはあるのだ。

但し、芸能音楽には全く興味がなく、日中も部屋でのんびり過ごしたい人にとっては、地獄である。何せ、入れ替わり立ち替わりやって来る生徒に、オレグやレゴンやらを教える為のガムランの

テープを一日 3 時間から 5 時間、それも大音量で聴かされる事になるのだから。

まあ、踊りを習い始めてはみたものの、今一つやる気の出ない人にとっては、嫌でも曲を覚える事になるし、ヌサドゥアあたりから一回のみの体験レッスンに来た観光客が、ドタバタ走り回りながらガボールの真似事をするのを、マンディールームから観察するのも、又、一興ではある。



Jl. Kajeng 25 Ubud, Bali, 80571 TEL 96277

U.S.A. DARI ~~JEPANG~~

在シアトル 吉田 由香理

ここ10年程アメリカに住んでいる私は、今回の東南アジア旅行中、初めてバリに来了。Ubudが気に入って、随分予定を延長して滞在してしまっている。さて、バリの芸術と宗教（ヒンドゥー教）がとても密接な関係にあるのは、言うまでもない。が、しかし、これはアメリカ的常識から見ると、すごい驚きなのだ。

人種のるつぼであるアメリカは、それぞれ色々な宗教を信じる人がいるけれども、全体としてはプロテスタントのキリスト教が大多数を占める。そして私の知る限りでは、他の先進国と比べて、敬虔なキリスト教徒の国である。この事実を以外だと思っている日本人も多い事と思う。それに、この事はどちらかと言うと、あまり良い意味にはとられていない。なぜなら、アメリカでは宗教的理由から、身近な日常生活の中で、日本では考えられない細かい規則が定められているからだ。何かと言うと、宗教団体が色々な事に口を出して、とてもうるさい存在なのだ。

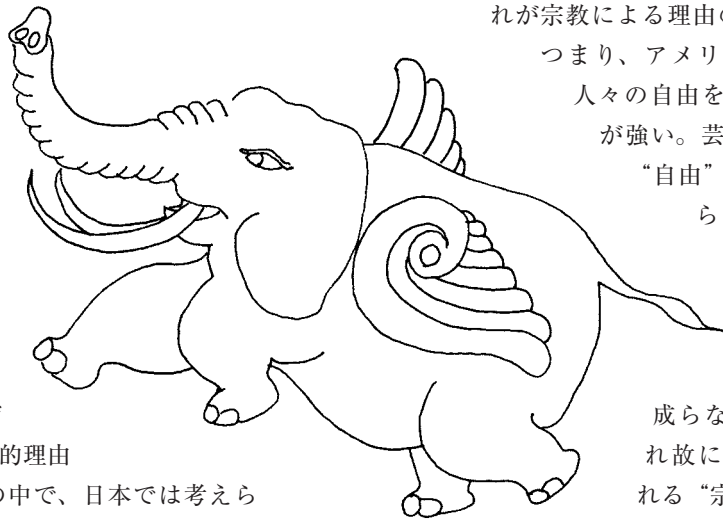
例えば、お茶の間のテレビ番組では、かなり夜遅くにならないと濃厚なラブ・シーンや、女性の裸体等はまず見られない（ケーブル・テレビは例外）。又、映画は全て視聴者年齢制限の規定によって“PG13”や“R”等とランク付けされる。因みに、PG13は“13才以下の子供は親同伴の事”、そしてRは“19才以上（確か？）対象”と言う具合。まあ、実際守られているかどうかは別として、こうして封切り前にランク付けする事によって、映画会社は各団体からう

るさく言われるのを避けている。タバコや金融業の宣伝・広告、又は未成年者に対する飲酒の規制もとても厳しい。お酒を店で飲むにしろ、買うにしろ、必ず写真付き身分証名書の提示が求められるぐらいなのだから。

もちろん、アメリカは“自由”を原則に成り立っている国。人々はそれぞれ望めば何でも手に入れる事ができる。表現の自由から始まって、あらゆる娯楽や銃までも手に入れる事ができる国である。しかしその反面、自由に対する厳しい規制があり、それが宗教による理由の場合が多い。

つまり、アメリカでは宗教が人々の自由を束縛する傾向が強い。芸術も基本的に“自由”でなければならず、それに何らかの制限を加えてしまえば、芸術に成らないと思う。それ故に、バリに見られる“宗教・芸術がほぼ一体となり存在する”なんて事、アメリカではまず起こり得ない（ごく

わずかのゴスペル音楽等の例外はあるけれど）。バリではそれが、ごく自然に生活の一部となっていて、人々はとても自由にのびのびと暮らしている。とても感嘆してしまう。Ubudにいて不思議な程感じる心地よさは、こういう所からきているんだろうなあと感じてしまう。



イラスト：OHARA



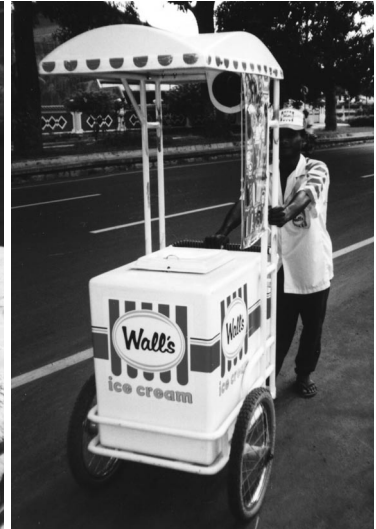
その他のニュース

■アイス・クリーム今昔物語!?

自転車の荷台にくくりつけた木枠の箱に、丸いクーラーBOXを取り付け、コーンの入った袋をぶら下げ、日本のトーフ屋のような笛を鳴らして売りに来る、バリのアイス・クリーム屋さん。残念なことに、これはもう昔の風物史になりつつあります。味のことはともかく体力に自信のない人にはお薦め出来ないかなというシャーベット状のアイス・クリームです。でも、もしサッカリンの味を是非一度味わってみたいという方がいたら、これはちょうどよいかもしれません。今ではお洒落で清潔な近代の手押しワゴンが、これまで町でしか買うことができなかつ



▲伝統的なアイス・クリーム屋さん



▲近代式のアイス・クリーム屋さん

た本物の美味しい Cammpina, Wall's, Peters の三社のアイス・クリーム会社が、バリ島のどこにでも「ランララ・ランラ・ランララ」「ターララ・ターララ」などと陽気な B・G・M を鳴らし出掛けてくれます。B・G・M が可愛く遠くから聞こえると思わず口ずさんでしまい、アイス・クリームが欲しくなってしまいます。この手押しワゴンがオダランの屋台にも出現し時代の様変わりを感じる、今日この頃の UBUD です。

■日本人女性専門ジゴロに要注意!!

UBUD 病の山本花子さん (20・仮名) は仲良し二人組で、憧れのチャンディダサに遊びに出掛けました。そこでたいへんいやな経験をしたそうで、その時のことを「恐かったです」と思い出していました。あるバリ人青年と知り合います。知合いになったというよりは、向こうから近づいてきて、親切にしてくれたのです。その親切がしだいに押しつけがましくなり、最後には押しつけ親切を遠慮すると怒りだし、「知り合いに警察官がいる、おまえたちをバリか

ら出られなくしてやる」と脅かすそうです。金銭的被害は被っていませんが、隠れるように UBUD に逃げ帰り、いつ彼がまたやって来るか怯え憂鬱な思いをしました。話を聞いているうちに、どうもこれは最近噂に聞く、クタ、ウブドゥ、チャンディダサに出没する日本人女性専門ジゴロと似ているということが判明した。聞くと、このジゴロ、非常に日本語がうまく「昨日日本から帰ったばかりです」と言われても信じてしまうほどだといいます。話も面白く、バリ・ダンスもできるので、バリ大好き日本人女性にとっては、興味ある話相手になります。しかしこいつがちよっとワルで、ある女性は 11 万円のお金をとられたそうです。すぐに警察に訴えたのですが、これがまた馬鹿な話、警察へ彼をつれていき 3 万円ほどを、やっとの思いで返してもらったのですが、警察を出ると、またお金を貸してくれと言われ、貸したというからあきれてしまいます。いくらバリ島が安全なところだとはいえ、これではだまされる方がちょっとばかし、おバカさんだったとしか言いようがありませんね。お互い Hati-Hati で、バリを楽しみましょう。

■ニョマン君とみどりちゃんの「HANA」開店!!

小誌 Vol. 2 でご紹介した新婚さん、ニョマン君&みどりちゃんが、かわいいインテリア&アンティークショップを開店しました。その名も「HANA」。Jl. Monkey Forest のサッカー場横から、パダン・テガルのケチャツの会場にぬける道の中ほどにあります。店内はラタンの敷物がひかれ、アンティークの織物やウッドカービング、お部屋に飾りたくなるテキスタイル、ハンガーや雑貨などのインテリア小物が揃っています。昼間はご主人のニョマン君かみどりちゃんが、おふたりの自慢の息子、将来がとつても楽しみなほど Ganteng な“Agus”君をつれてきています。営業時間はだいたい朝の 9:00 から夜 9:00 頃まで。ジャラン・ジャランの途中にでもお寄りください。



■もう一つのバリ・アガ?

1995年6月30日：オダラン男と異名をとる小田蘭丸氏（高齢）はガイド・ブック頼りに、バリ・アガの村、テガナンへ“Mekare-kare”の儀式を見にでかけた。サボテンの葉で戦い合う、悪霊をおさめる儀式のようだ。前々から耳にはしていたが見るのは今回が初めてのことらしい。それは上半身裸の男性が、左手に盾を



持ち、右手にはサボテンの葉を 30 センチほどの長さに切ったものを三枚ほど束ねて持ち、一対一で戦う。戦うというよりは傷つけ合うという感じ。線状に傷つけられたところは血が滲み、そしてサボテンの棘が刺さっている。見ていて痛々しく感じたようだ。そして蘭丸氏は帰道【Tenganan Dauh Tukad はこちら】という看板を見つけ寄ってみた。本道から 3 キロほど山に入った突き当たりの村で、さきほどのテガナンがかなり観光化されているのに比べ、素朴そのもので「これが本当のテガナンだ」と感動したという。しかし、あとから聞いたところによると、この村は昔々のその昔、テガナンから何かの理由で移り住んだ人々がつくった村だそうだ。もう一つの知られざるテガナンということか。蘭丸氏は「この村でも本家と同じ儀式があるという。物真似なのかもしれないが、ひなびた風景の中で見る儀式は昔を彷彿させてくれるかもしれない。だまされたと思って立ち寄ってみるのよいかも」と語っていた。

■ルバブをかかえた Orang Jepang. Ubud 周辺のガムラン・グループに出演!!

小誌コラム「ビンタン・涅槃楽」でおなじみの南部弘氏（年齢不祥）が Ubud でルバブを習い始めて約 4 ヶ月。ルバブとは、中国のコキウに



似たバリの弦楽器で、演奏法も音の出し方も非常に面白い、とっても難しい楽器である。Katanya、日本ではロック・ギタリストとして活躍している南部氏。このルバブに取り組み始めて以来「いつか Ubud のゴング・グループと競演(?) したいっ」というのが彼の悲願であったわけだが、バリ人の懐の広さゆえ、もしくは彼の素晴らしいテクニクゆえ、今日は“Semara Ratih”、明日は“Tirta Sari”と思わぬ東西西走の忙しい協演となった。ステージにあがってきた犬を追い払おうとして、自分の弓を折ってしまうなどの失態はあったようだが、口を尖らせて真剣に弾く姿は、さながら長髪のガムラン・ジャック。あなたも観ましたか?

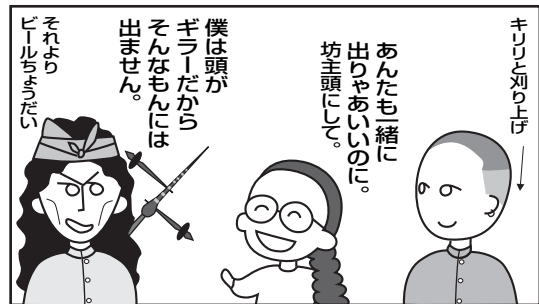
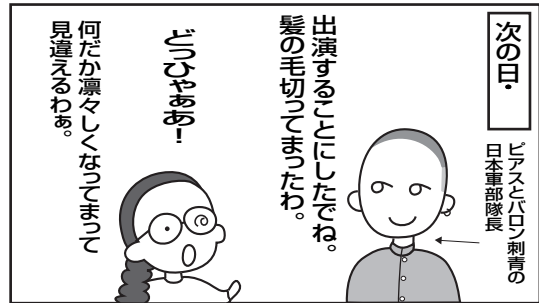
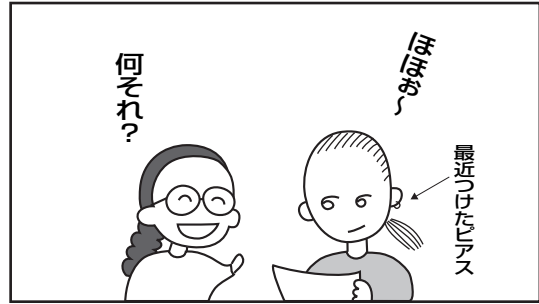
■ UBUD に TATTO 屋開店 !!

TATTO 屋ってリゾートっぽい感じがして、UBUD に似合っていないような、いるような。Jl: Raya Ubud から Jl: Honoman へ少し入った左手に、ガラス窓を大きくとって明るくファッショナブル (?) な TATTO 屋が開店した。雰囲気からすると「お気軽にどうぞ」という感じだが、そう言われても日本人にはそうもいかない。小誌 Vol. 8 で若気のいたりとして、TATTO をした不良中年がいましたが、善良な一般市民にはなかなか簡単にできるものではありません。が、中には彼のように TATTO をしたいと思っている人がいるかもしれません。そういう人にとっては、知り合いを頼って TATTO 師を探さなくてもよいのは、大助かりかもしれません。それよりも心配なことは、場所が Padang tegal ということである。ひょっとして、地元のみで御値打ち価格で TATTO が入れてもらえるということになったら、Padang tegal のケチャを演じる男たち全員が TATTO 入りになるかもしれない。まさかとは思いますが、それも背中に Donald Duck だったら。あ〜考えただけでグウエグウエです。まあ予想するに、観光客向けの開店だと思われるので、そんな心配は無用かもしれません。が、やはり心配です。

■ウォーター・スライダー体験!

1995年7月24日: Ubud に長期滞在している、高所恐怖症の I 氏(高齢)は、バリ島南部のリゾート地クタに数人の友人とでかけた。Waterbom Park に、バリ島最大級と噂される(もっともここにしかないが)ウォーター・スライダーがあると聞き、体験に来たのだ。I 氏はウォーター・スライダーのことを何も知らない。日本人の方には今さら説明するまでもないがウォーター・スライダーとは、スベリ台の長いやつに水が流れていて、水流と共に猛烈な勢いで急降下し、恐怖感と爽快感を味わうものだ。I 氏は体験後「タタタタが痛い!!」とわけのわからない発言をしていたが、並ぶことがないので何度も滑って楽しんでいたらもう。子供のコーナーもあり、ライフ・ガードもしっかりしているようで安心して遊ぶことができそうです。レストラン、カフェも充実していて、一日中、のんびりと水とたわむれることができます。そしてここは日本と違い TATTO の入った身体でも、何の気兼ねもありません。「たまには UBUD を離れてリゾートもいいものだ」と I 氏は感想を述べていました。

うっぱな人々 その10 ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会:伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、3,000 円。おれかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座: 00190-6-573859 「影の出版会」です。



September

- 13 Pura Dalem Terukan, Pulasari - Bangli.
Pura Agung Gunung Raung, Taro Kaja
- Tegallalang, Gianiyar.
- 23 Pura Bathara Ratu Gede, Celuk - Sukawati, Gianiyar.
Pura Bathara Ratu Widyadari, Cemenggaon - Sukawati
- Gianiyar.
Pura Panti Gelgel Pengembangan, Sesetan- Denpasar.
Pura Bathara Ratu Alit & Ratu Lingsir, Singakerta - Ubud.
- 25 Pura Ulun Kulkul, Besakih - Karangasem.
- 27 Pura Melanting, Cemenggaon, - Sukawati, Gianiyar.
Pura Gaduhan Jagat, Singekerta - Ubud.
Pura Masceti, Tegeh - Mancawarna, Sanding - Gianiyar.



イラスト：FUMIO

October

- 3 Pura Dalem, Batuyang - Batubulan, Gianiyar.
Pura Pasek, Pura Pucak, Banjar Taman - Bedulu, Gianiyar.
- 4 Pura Dalem Samprangan, Gianiyar.
- 8 Pura Desa, Celuk - Sukawati, Gianiyar.
- 9 Pura Tirta Empul, Tampaksiring - Gianiyar.
Pura Puseh, Pura Desa, Pura Penataran, Pura Hyang
Basuki, Pura Luhuring Akasa, Cemenggaon
- Sukawati, Gianiyar.
Pura Tirta, Negari, Singapadu - Gianiyar.
- 18 Pura Puseh, Pura Desa, Pura Penataran Tangsub
- Sukawati, Gianiyar.
- 28 Pura Penataran Agung, Tegallalang Gianiyar.
Pura Desa, Denjalan Tegaltamu, Gianiyar.
Pura Puseh, Singakerta - Ubud.
Pura Penataran, Sanding - Gianiyar.
Pura Pasek, Getra Kawan - Kedewatan, Ubud.
Pura Laban Sindujiwa, Kadewatan - Ubud.
Pura Jogan Agung, Ketewel - Sukawati, Gianiyar.
Pura Masceti, Selasih - Sanding, Gianiyar.

Zwinkeln

Pengumuman

ワープロありがとうございました!

Vol.8のこのコーナーでお願いしたワープロの件ですが、読者の方と読者のお友達からと、なんと2台も寄付していただきました。「世の中にはやさしい人がいっぱいいるのね…」と心から感激してしまいました。たいへん助かります。無事に動いてバリバリ役にたっております。あとは猫のイタズラとアリの襲撃からいかにマシンを守るか…というのか当面の課題であります。(笑) どうもありがとうございました。

編集部一同

“極通”編集部<バリ本部>からのおねがい。

いつもいつも、みなさまの暖かいご協力、ご声援、心から感謝しております。バリ本部のなまけ病でみなさまにはたいへんご迷惑をおかけしていると思います。小誌の発送が遅れたり、届かなかったり…。どうもすみません。いい訳っぽいですが、インドネシアの郵便事情がそもそも、かなりアプナイものでして。何ヶ月も届かなかった場合、バリ本部に直接おハガキを下さい。

先日お叱りのTELが、東京の連絡先・ポトマックさんにあったのですが、ポトマックのほりさん&えりさんは、ボランティアで発行人のお手伝いをしてくださっている方なので、苦情&質問、その他めんどろなことは、すべてバリ本部までお便りください。しかし、励ましや慰めそして差し入れ(笑)などは大歓迎ですのでどしどし東京連絡先の方にどうぞ。

いつもは許せる"ティダアバアバ"や"ジャムカレツ"も時としてはブツン!とキレル事もありますが、それでも信仰深く、ある面で日本人に似て奥ゆかしくシャイで笑顔の素敵なインドネシア人が大好きです。同じ思いのBALIフリークの方、よろしかったらお手紙ください。

〒063 札幌市西区西野13条8丁目3-6 石井真利奈

ꦲꦸꦢ꧀, ꦠ ꦲꦸꦢ꧀, ꦠ ꦲꦸꦢ꧀, ꦠ ꦲꦸꦢ꧀, ꦠ ꦲꦸꦢ꧀, ꦲꦸꦢ꧀, ꦲꦸꦢ꧀.



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi S. / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：夢姫（駄場真弓）

ロゴデザイン：Hiroko S.

極楽通信「UBUD」Vol. 10

1995年8月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud, Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1995 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内 , tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803